

日本西アジア考古学会

第28回総会・大会要旨集



2023. 6. 24-25

日本西アジア考古学会
白鷗大学

表紙写真：KV62 ツタンカーメン王墓（近藤二郎氏提供を改変）

日本西アジア考古学会
第28回総会・大会要旨集

2023. 6. 24-25

日本西アジア考古学会
白鷗大学

日本西アジア考古学会 第28回総会・大会プログラム

第1日 2023年6月24日（土） 研究発表1・特別講演会

13:00 開会挨拶 三宅 裕 日本西アジア考古学会会長

研究発表1

13:10 馬場 匡浩

エジプト王朝成立とビール

13:30 竹野内 恵太

エジプト先・初期王朝時代における儀礼用容器の様式化プロセス

13:50 山崎 世理愛

エジプト中王国時代における襟飾りを用いた葬送儀礼の展開

14:10 有村 元春

後期青銅器時代のエジプトで流通した外来系黒色磨研土器
ー小型片把手壺の生産地に関する再検討ー

14:30 矢澤 健、吉村 作治

エジプト新王国時代のシャフト墓のタイプ分類試論

14:50 花坂 哲

古代エジプトにおけるハリネズミ：その信仰と権能

15:10 休憩

特別講演会

15:30- 近藤 二郎 先生（一般社団法人日本オリエント学会会長・早稲田大学名誉教授）

17:00 エジプト新王国第18王朝時代の王墓：その立地と構造

18:00 懇親会

第2日 2023年6月25日（日） 研究発表2・研究発表3

研究発表2

10:00 南澤 武蔵

「西アジア考古学」の範囲は高等学校でどのように教えられるか：新しい学習指導要領と教科書より

10:20 門脇 誠二、田村 亨、木田 梨沙子、廣瀬 允人、須賀 永帰、西秋 良宏

南ヨルダン、Tor Faraj 遺跡における中部旧石器技術の多様性と理化学年代

- 10:40 木元 菜奈子、門脇 誠二
レバント地方の終末期旧石器時代における貝製ビーズのネットワーク分析
- 11:00 休憩
- 11:10 西秋 良宏
南コーカサス中石器・新石器時代の幾何学形細石器
- 11:30 三木 健裕
イラン南西部ファールス地方新石器時代の土器を再考する—タル・イ・ムシュキ、タル・イ・ジャリ B 遺跡を中心に—
- 11:50 小高 敬寛、下釜 和也、三木 健裕、板橋 悠
イラク・クルディスタン、シャイフ・マリフ遺跡Ⅱ号丘の年代について
- 12:10–12:20 第 5 回 川又記念 日本西アジア考古学会奨励賞 授与式
- 12:20–13:30 昼食休憩
- 13:00–13:30 ポスターセッション・コアタイム
- 13:30–14:30 第 28 回総会
- 14:30–14:40 休憩
- 研究発表 3**
- 14:40 田邊 幹太郎
前期青銅器時代ユーフラテス中流域におけるステップと低地—テル・ガーネム・アル・アリ近傍墓域群の空間分析から—
- 15:00 常木 麻衣
古代メソポタミアにおける分銅の標準値に関する予察
- 15:20 西山 伸一
イラク・クルディスタン、ヤシン・テペ遺跡出土の「アヒル」型分銅：アッシリア帝国の度量衡制度の一考察
- 15:40 津村 眞輝子
境界域で発行される銀貨の特徴：ヘレニズム・ローマ時代の出土資料を中心に
- 16:00 植月 学、山内 和也、アマンバエバ バキット
アク・ベシム遺跡の二街区における動物資源利用の差とその意味
- 16:20 閉会挨拶 齋藤 正憲 日本西アジア考古学会第 28 回大会実行委員長

ポスターセッション

6月24日(土) 15:10-17:00、6月25日(日) 11:00-16:30 (コアタイム 13:00-13:30)

- P-1** 安倍 雅史、山田 綾乃、長尾 琢磨、鈴木 崇司、岡崎 健治
バハレーン、ワーディール・アッサイル考古学プロジェクト 2023
- P-2** 山田 綾乃、高橋 奈緒、柴田 みな、長尾 琢磨、安倍 雅史
後藤健氏旧蔵、西アジア文化遺産写真のデジタル・アーカイブ化
- P-3** 長尾 琢磨、山田 綾乃、安倍 雅史
バハレーンにおけるイスラーム墓碑の3次元計測調査
- P-4** 佐々木 蘭貞
バハレーン国水中文化遺産調査の可能性
- P-5** 黒沼 太一、三木 健裕、田邊 幹太郎、近藤 康久
オマーン・タヌーフ峡谷の中期青銅器時代集葬墓：型式と構築背景の検討

目 次

特別講演発表要旨

エジプト新王国第 18 王朝時代の王墓：その立地と構造	近藤 二郎 ……………	9
-----------------------------	-------------	---

研究発表要旨

エジプト王朝成立とビール	馬場 匡浩 ……………	15
エジプト先・初期王朝時代における儀礼用容器の様式化プロセス	竹野内 恵太 ……………	17
エジプト中王国時代における襟飾りを用いた葬送儀礼の展開	山崎 世理愛 ……………	19
後期青銅器時代のエジプトで流通した外来系黒色磨研土器 ー小型片把手壺の生産地に関する再検討ー	有村 元春 ……………	21
エジプト新王国時代のシャフト墓のタイプ分類試論	矢澤 健、吉村 作治 ……………	23
古代エジプトにおけるハリネズミ：その信仰と権能	花坂 哲 ……………	25
「西アジア考古学」の範囲は高等学校でどのように教えられるか： 新しい学習指導要領と教科書より	南澤 武蔵 ……………	27
南ヨルダン、Tor Faraj 遺跡における中部旧石器技術の多様性と理化学年代 門脇 誠二、田村 亨、木田 梨沙子、廣瀬 允人、須賀 永帰、西秋 良宏 ……………		29
レバント地方の終末期旧石器時代における貝製ビーズのネットワーク分析 木元 菜奈子、門脇 誠二 ……………		31
南コーカサス中石器・新石器時代の幾何学形細石器	西秋 良宏 ……………	33
イラン南西部ファールス地方新石器時代の土器を再考する ータル・イ・ムシュキ、タル・イ・ジャリ B 遺跡を中心にー	三木 健裕 ……………	35

イラク・クルディスタン、シャイフ・マリフ遺跡Ⅱ号丘の年代について 小高 敬寛、下釜 和也、三木 健裕、板橋 悠 ……………	37
前期青銅器時代ユーフラテス中流域におけるステップと低地 ーテル・ガーネム・アル・アリ近傍墓域群の空間分析からー 田邊 幹太郎 ……………	39
古代メソポタミアにおける分銅の標準値に関する予察 常木 麻衣 ……………	41
イラク・クルディスタン、ヤシン・テベ遺跡出土の「アヒル」型分銅： アッシリア帝国の度量衡制度の一考察 西山 伸一 ……………	43
境界域で発行される銀貨の特徴：ヘレニズム・ローマ時代の出土資料を中心に 津村 眞輝子 ……………	45
アク・ベシム遺跡の二街区における動物資源利用の差とその意味 植月 学、山内 和也、アマンバエバ バキット ……………	47
 ポスター発表要旨	
バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクト 2023 安倍 雅史、山田 綾乃、長尾 琢磨、鈴木 崇司、岡崎 健治 ……………	51
後藤健氏旧蔵、西アジア文化遺産写真のデジタル・アーカイブ化 山田 綾乃、高橋 奈緒、柴田 みな、長尾 琢磨、安倍 雅史 ……………	53
バハレーンにおけるイスラーム墓碑の3次元計測調査 長尾 琢磨、山田 綾乃、安倍 雅史……………	55
バハレーン国水中文化遺産調査の可能性 佐々木 蘭貞 ……………	57
オマーン・タヌーフ峡谷の中期青銅器時代集葬墓：型式と構築背景の検討 黒沼 太一、三木 健裕、田邊 幹太郎、近藤 康久 ……………	59

特別講演要旨

エジプト新王国第 18 王朝時代の王墓： その立地と構造

近藤 二郎

早稲田大学 名誉教授

はじめに

1922 年 11 月に、エジプト南部のルクソール市の対岸に位置する新王国（第 18～20 王朝）時代の王墓地である「王家の谷（The Valley of the Kings）」で、イギリス人の第 5 代カーナヴォン卿の後援を受けて、ハワード・カーターが発見した小岩窟墓は、王名表から抹殺されていた新王国第 18 王朝のツタンカーメン王（在位：前 1336～前 1327 年頃）のものであり、墓内部からはこれまで知られてはいなかった豪華な王の副葬品が出土した。このツタンカーメン王墓の発見は、20 世紀のエジプト考古学史上で最大の発見である。昨年 2022 年には、ツタンカーメン王墓発見 100 周年を迎えた。本講演では、この 100 周年を機会として、古代エジプト新王国第 18 王朝時代（前 1550～前 1069 年頃）の王墓の位置と構造を振り返り、整理することで、第 18 王朝時代の王墓の変遷について幾つかの問題点をあげてお話ししていく。

第 18 王朝の王墓

現在のところ、王家の谷で確認されている最古の王墓は、第 18 王朝のハトシェプスト女王（在位：前 1473～前 1458 年頃）が、父のトトメス 1 世（在位：前 1504～前 1492 年頃）の遺骸を合葬した女王の王墓（KV20）である。トトメス 1 世の王墓（KV38）は、後にトトメス 3 世（在位：前 1479～前 1425 年頃）によって新たに造営されたものであり、トトメス 1 世の本来の王墓については現時点では不詳である。ハトシェプスト女王の夫であったトトメス 2 世（在位：前 1492～前 1479 年頃）の王墓は、王家の谷では発見されておらず、おそらくハトシェプスト女王の葬祭殿が建造されたアル＝ディール・アル＝バハリ（al-Deir al-Bahari）に埋葬されたとされる。

第 18 王朝初代のイアフメス王（在位：前 1550～前 1525 年頃）墓に関しては、大英博物館に所蔵（BMEA10221）されているアボット・パピルス（Abbott Papyrus）に記述がある。このパピルスは、第 20 王朝ラメセス 9 世（在位：前 1126～前 1108 年頃）の治世 16 年増水季（アクト季）第 3 月 18 日にテーベ西岸で実施された王墓の巡回記録である。このパピルスには、合計 10 基の王墓（1 基の王子墓を含む）が記載されており、内訳は第 11 王朝の墓が 2 基、第 17 王朝の墓が 6 基、そして第 18 王朝の墓が 2 基の計 10 基である。この 10 基の中で、アル＝タリフ（al-Tarif）地区のアンテフ 2 世（在位：前 2112～前 2063 年頃）墓とアル＝ディール・アル＝バハリ地区のメンチュヘテフ 2 世（在位：前 2055～前 2004 年頃）墓の第 11 王朝の王墓の場所は古くから判明していたが、2001 年に、ドゥラ・アブー・アル＝ナージャ（Dra Abu al-Naja）北地区でドイツ考古学研究所のダニエル・ポルツ（Polz, Daniel）により、第 17 王朝のアンテフ 7 世（在位：前 1571～前 1566 年頃）の墓が再発見された。アンテフ 7 世墓は、斜面に建造された日乾煉瓦造の小ピラミッドを持つ構造のものであった。ポルツのアンテフ 7 世墓の発見から 20 年以上が経過しているが、アボット・パピルスに記載された他の 7 基の墓に関しては、未だに正確な位置は不詳である。

また記載された 10 基の墓の中で、9 基の墓が、メル (*mr*:「ピラミッド墓」の意) と記されているが、アメンヘテプ 1 世墓だけが、「永遠の地平線」と全く異なった語で表現されている。一般にこのことは、アメンヘテプ 1 世墓から王墓の構造が変化して、それまで王墓と葬祭施設とが同じ場所にあったものが、王墓と葬祭施設 (葬祭殿) とを分離したことによるとされている。ただし、アメンヘテプ 1 世の王墓は現在までのところ未発見であり、この用語の正確な意味は明らかではない。

ハトシェプスト女王の治世以降、王家の谷は第 18 王朝の王の埋葬地として、その後の諸王の王墓が造営され続けた。このことは、ハトシェプスト女王が自らの葬祭殿を中王国第 11 王朝のメンチュヘテプ 2 世がアル=ディール・アル=バハリ地区に造営した巨大な葬祭複合体の北隣りに軸線を合わせて建設し、中王国時代に起源をもつとされる「谷の祭」を大々的に祝った。ハトシェプスト女王の治世では、ナイル川西岸にあるハトシェプスト女王葬祭殿を目的地として、テーベ東岸のカルナク・アメン大神殿からアメン・ラー神がナイル川を渡り、再びアメン大神殿に戻るコースで実施された。このことからカルナクのアメン大神殿の東西を貫く主軸線となっていくた。メンチュヘテプ 2 世葬祭複合体の主軸線と隣接して位置するハトシェプスト女王葬祭殿の主軸線の方位角は 116° であり、冬至の太陽の日の出方向と合致しており、さらには、この方位角がカルナク・アメン大神殿の東西主軸線とも一致している。また、ハトシェプスト女王治世には年中行事化されたとみられるテーベのもうひとつの重要な祭礼である「オペトの大祭」も、王家の谷の位置を説明するための重要な要素となったと考えられる。こうして王家の谷は、アル=ディール・アル=バハリの東西主軸線上に位置して形成されるようになった。

ハトシェプスト女王墓 (KV20) は、王家の谷・東谷の南東端に位置している。次のトトメス 3 世墓 (KV34) は東谷の南端の断崖上に穿たれており、トトメス 3 世の息子で後継者のアメンヘテプ 2 世 (在位: 前 1492~前 1479 年頃) 墓 (KV35) は、ハトシェプスト女王墓 (KV20) と対峙する東谷の北西端に位置している。そして、アメンヘテプ 2 世の後継者であるトトメス 4 世 (在位: 前 1400~前 1390 年頃) の墓 (KV43) は再びアメンヘテプ 2 世墓 (KV35) と対峙するハトシェプスト女王墓 (KV20) の南側に造営されている。

しかしながら、トトメス 4 世の息子で後継者であるアメンヘテプ 3 世 (在位: 前 1390~前 1352 年頃) の王墓 (KV22) は、王家の谷・東谷ではなく、さらに北西側に位置する王家の谷・西谷に造営されている。

1915 年 2 月にハワード・カーターは、アメンヘテプ 3 世墓 (KV22) の入口外側で鎮壇具 (Foundation-Deposit) を発見したが、この中にはアメンヘテプ 3 世ではなく、トトメス 4 世の即位名・誕生名を記したファイアンス製飾板が 98 枚含まれていることから、この王墓 (KV22) が父トトメス 4 世により造営が開始されたことを示している。何故、トトメス 4 世が王家の谷・東谷に用意された墓 (KV43) ではなく、王家の谷・西谷に王墓の造営を開始したかは不明である。アメンヘテプ 3 世墓 (KV22) E 室の壁面に描かれたアメンヘテプ 3 世のカー像のホルス名が、アメンヘテプ 3 世のホルス名ではなく、トトメス 4 世のホルス名になっていることも注目すべきことである。

王家の谷・西谷にあるアイ王 (在位: 前 1327~前 1323 年頃) の墓 (KV23) は、墓の平面プランや規模から考えるとアメンヘテプ 4 世 (後のアクエンアテン王、在位: 前 1352~前 1336 年頃) がテーベに造営した王墓と考えられる。アメンヘテプ 4 世は、即位してから少なくとも 4 年間はテーベの王家の谷で王墓の造営工事をしていたが、その後、王都をテーベからアマルナに遷都することで放棄されたものである。アイ王墓 (KV23) が、テーベにおけるアメンヘテプ 4 世墓であるとすれば、従来から言われていたアイ王墓とツタンカーメン王墓 (KV62) の交換説は成り立たないことになる。ツタンカーメン王もアマルナを廃してメンフィスに遷都してから約 8 年間、テーベの王家の谷で自らの王墓

の造営をしていたと考えられる。このことからツタンカーメン王のために、王家の谷に造営されていた王墓を検討してみると、その候補は唯一、ホルエムヘブ王（在位：前 1352～前 1336 年頃）の墓（KV57）がある。近い将来、ホルエムヘブ王墓（KV57）の入口外側を発掘することで、この墓の造営を始めた王の鎮壇具(Foundation-Deposit)が発見されれば、本来のツタンカーメン王墓であるかどうか判明するであろう。

参考文献

近藤二郎 1997「王家の谷の新王国時代の王墓」『エジプトの考古学』同成社、129-149 頁。

Peet, E. 1930 *The Great Tomb-Robberies of the Twentieth Egyptian Dynasty*, Oxford University Press, Oxford.

Reeves, C.N. 1989 *Valley of the King: the Decline of a Royal Necropolis*, London.

Thomas, E. 1966 *The Royal Necropoleis of Thebes*, Princeton.

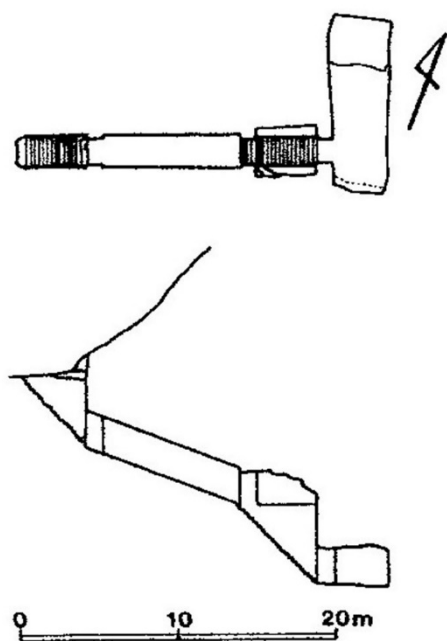


図1 チュウヤとイウヤの墓 (KV46)

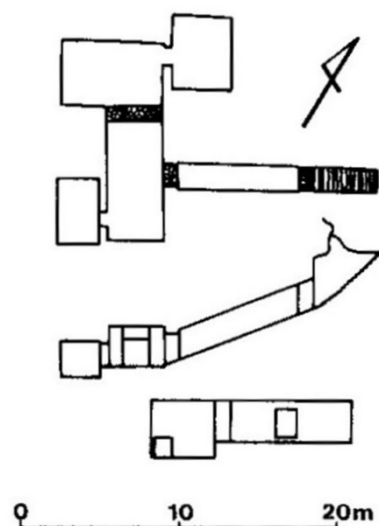


図2 ツタンカーメン王墓 (KV62)

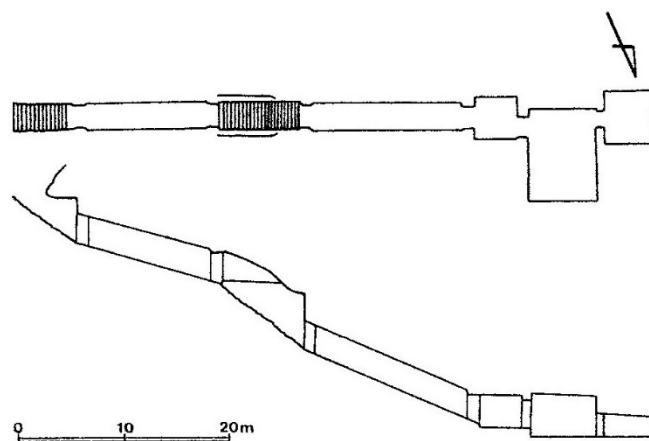


図3 アイ王墓 (KV23)

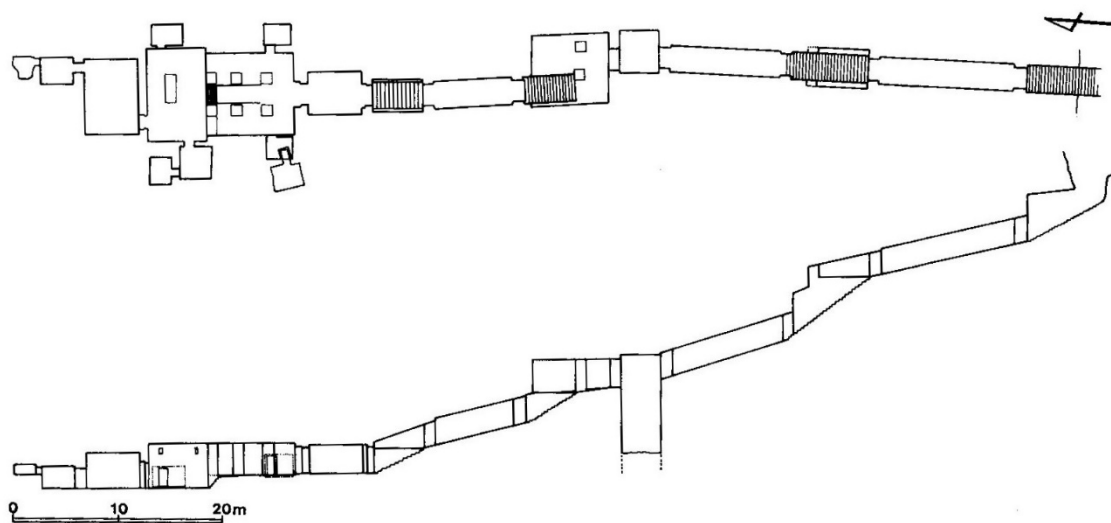


図4 ホルエムヘブ王墓 (KV57)

研究発表要旨

エジプト王朝成立とビール

馬場 匡浩

早稲田大学考古資料館 学芸員

先王朝時代のヒエラコンポリスでは、エジプト最古の大型ビール醸造施設がみついている。それは、エリート墓地（HK 6）に隣接する。通文化的にみても、アルコールが地位や権力の維持強化として機能していたことは確かであろう。本発表では、ヒエラコンポリスにみられるビールと権力の関係を考古資料から明らかにし、それを初期国家形成の文脈で考えたい。

およそ 20 年の発掘調査により、ナイル川沖積地から 2 km ほど離れた低位砂漠の涸れ谷内には、エリート墓地、祭祀施設、ビール醸造施設が存在することが明らかとなった。これらは、エリートによる権力顕示の儀礼空間を構成する要素といえる。エリート墓地ではこれまで 80 基ほどの墓が調査されたが、それらは、現世のレイアウトを再現しているかのように大型墓を中心とする複合体を呈している。墓以外の構造物も伴い、長軸 15m の矩形の多柱建造物（Structure 07）は、葬送儀礼やその後の祭祀を執り行う施設であったと考えられている。こうした儀礼祭祀の場は、他にも確認されている。それは、エリート墓地北端で検出された人工的なマウンドである。ここでは、墓地を守護する大型の土製カバを据え、土製人形などの供物を奉献する祖先祭祀がおこなわれていたと想定される。さらに磁気探査により、エリート墓地から東方の涸れ谷内には、長軸 20m を超える矩形の構造物が複数存在することが判明し、これらも饗宴などの祭祀施設であったと思われる。

ビール醸造址（Operation B）は、エリート墓地の対岸で発見されている。直径 1m ほどの大型甕を用いた加熱施設が 5 つ並び、一度の火入れで 300 リットルの麦汁が生産可能である。加熱施設には粗製壺（ビール壺）の焼成窯も併設され、ここはビール生産の大型統合施設といえる。ビールであることは、化学分析で証明されている。大型甕内残滓の代謝分析では、穀物の糖類発酵による副産物が多く検出された。また、微化石分析では、粗製壺と小型精製ビーカーから糖化により変形したデンプン粒と、イースト細胞やシュウ酸カルシウム（ビール・ストーン）も確認された。よって、粗製壺はビールの貯蔵と運搬のためであり、墓地からも多くみつかることからビールの副葬にも用いられた。小型精製ビーカーは、エリート墓地北端のマウンドに特徴的に出土しており、儀礼祭祀におけるビールの奉献や飲酒用として使われたのであろう。ビールが墓地や祭祀施設において欠かせないアイテムであったことはまちがいない。

このように、ヒエラコンポリスにおいてビールを用いた儀礼空間が創出された。構成要素の年代は、どれも同じくナカダ IC-IIAB 期である。どこよりもはやくエリートが生まれ、かれらの地位と権力を維持・拡大させる儀礼祭祀が一つの大きな契機となって、国家形成プロセスは進行したと考えられる。スサを混和した粗製壺は、ヒエラコンポリスにてエリートのためのビール壺として誕生したが、ナカ

ダII C 期までには上エジプト全体に拡散する。加えて、ビール醸造址もナカダなどの主要な遺跡で見られるようになる。おそらく、ビールを用いた儀礼祭祀や再分配システムが社会を束ねるツールとして他地域で模倣、またはヒエラコンポリスの政体拡大により、ビールの醸造と壺生産がパッケージとして広がったのであろう。また、ビールが権威のシンボルであることから、壺自体にも価値が付加され、それを副葬する概念も一般化する。この流れは、デルタにも到達する。近年、テル・エル＝ファルカとブトでは、II C -D 期層からビール醸造施設が検出され、在地生産のビール壺も出土するようになる。これまで言われてきたナカダ文化流入の実質的な開始と時期を一にする。ヒエラコンポリスにはじまる儀礼祭祀と社会統制の共有が物質文化の均質化をもたらし、それが下地となって後の政治的統合が達成されたと考えられる。

参考文献

- Baba, M. 2011 Pottery Production at Hierakonpolis during the Naqada II Period: Toward Reconstruction of the firing technique. In R.F. Friedman, and P.N. Fiske (eds.), *Egypt at its Origins 3. Proceedings of the Third International Conference "Origin of the State. Predynastic and Early Dynastic Egypt"*, London, 27th July-1st August, 647–670. Leuven, Peeters.
- Baba, M. 2021 Ceramic Assemblages from HK11C at Hierakonpolis: Specialization examined. In E.C. Köhler, N. Kuch, F. Junge and A.-K. Jeske (eds.), *Egypt at its Origins 6. Proceedings of the Sixth International Conference "Origin of the State. Predynastic and Early Dynastic Egypt"*, Vienna, 10th-15th September 2017, 1–20. Leuven, Peeters.
- Farag M.A., M.M. Elmassry, M. Baba and R. Friedman 2019 Revealing the constituents of Egypt's oldest beer using infrared and mass spectrometry. *Scientific Reports* 9(1): 16199.
- Wang, J., R. Friedman and M. Baba 2021 Predynastic beer production, distribution, and consumption at Hierakonpolis, Egypt. *Journal of Anthropological Archaeology* 64: 101347.

エジプト先・初期王朝時代における 儀礼用容器の様式化プロセス

竹野内 恵太

早稲田大学文学学術院 講師

1. はじめに

古代エジプトにおいて、神殿や礼拝室、墓前で実施される儀礼や使用祭具がおおよそ初期王朝時代から古王国時代にかけて様式化していく。特に第 1～3 王朝における神殿址や祭祀遺構の出土容器は多様な器形を含みながらも概ね共通の組成であり、ある程度様式化した儀礼用容器のセットを示す。

本発表では主に祭祀遺構から出土した土器および石製容器を対象として、その経時性を辿ることで、王朝時代の伝統化した儀礼用容器への様式化プロセスを再構築する。それにより、先王朝～初期王朝時代の文明形成期における儀礼祭祀の展開の一端を論じる。対象資料は基本的に祭祀遺構出土のものであるが、副葬土器も補完資料として扱う。

2. ヘス壺の系統と様式化

儀礼用土器の中でも最も代表的なものとして、まずヘス壺が挙げられる。この土器は種々の場面で献水の儀礼に用いられた。初期王朝時代あるいはそれ以降のヘス壺は、基本的に口縁から肩部にかけて黒色を呈し、底部がやや広がる長胴の器形をもつ。特にヒエラコンポリスやアビドスなどの上エジプト地域のヘス壺は、おそらく IIC-D 期における壺形の黒頂土器の系統などにあると考えられている (Sowada 1999: 100)。一方、下エジプト地域では同時期 (IIIA-B 期) においてそのようなヘス壺の出土事例はないが、タルカンの IIIA2-B 期における墓前祭祀遺構 (Petrie 1914: 2-3) 出土長胴壺の一部は、相伴土器の組成や後代の神殿址出土のヘス壺の変異幅などを勘案すると、献水儀礼に用いられた可能性がある。ここでは、その後テル・エル＝ファルカの礼拝室 (IIIB-C1 期) (Jucha 2003: 193; Sobas 2012: 191-196) から出土するようなヘス壺の原形へとつながっていく可能性を想定する。

そして、第 1 王朝以降のヘス壺は、IIIA-B 期における上下エジプトの系統を異にするヘス壺それぞれの諸特徴をあたかも併せ持ったような器形になっている。第 3 王朝の図像表現なども考慮すると、第 1 王朝以降の様式化したヘス壺は、IIIB-IIIC1 期頃に系譜を異にする上下エジプトのヘス壺の諸特徴の兼備によって生成された可能性がある。テル・エル＝ファルカ出土のヘス壺がすでに上エジプトの影響下で生成された可能性も排除できないが、いずれにせよ IIIB-C1 期頃に上下エジプトでヘス壺の諸特徴が共有されていくようになったのは確からしい。

3. 祭祀遺構出土儀礼用土器群の変遷

IIIB-C1 期には、テル・エル＝ファルカの礼拝室および同時期のヒエラコンポリスの HK29A

(Friedman 2009: 99–100) から、先のヘス壺を含む王朝時代に特有の伝統的な儀礼用土器の原形およびその選択性を示すものが出土している。前者の儀礼用土器群は、ヘス壺など一部の土器はタルカンの墓前祭祀遺構出土のもの（IIIA2-B 期）を引き継いでいるようにみえるが、ほかの多くが上エジプト地域に由来する土器で構成されていると考えられる。現時点で双方の前後関係を確定させることが難しいため断定はできないものの、IIIB-C1 期頃にかけて、ヒエラコンポリスにおいて儀礼用土器群の選択性が急速に再構成されるとともに下エジプト地域と緩やかに共有化を達成した可能性がある。

4. 石製双耳壺のモデル化・小型化

王朝時代では、聖油の決定詞としてしばしば登場し、祭祀遺構からはモデル化した石製の小型容器として出土する。各祭祀遺構出土の石製双耳壺を時期別に整理・比較すると、ヒエラコンポリスにおいて実物サイズの双耳壺を何らかの儀礼祭祀のコンテキストの中で用いる習慣が IIC-D～IIIA 期頃に生まれ、それが IIIB 期以降に下エジプト（特にテル・エル＝ファルカ）でモデル化・小型化したものとして受容された可能性が高い。

5. 小結と課題

以上より、IIIB-C1 期において、系統を異にする長胴壺の融合による伝統的ヘス壺の形成（あるいは上下エジプトでヘス壺の共有）、上下エジプトにおける儀礼用土器群の様式化と共有、石製双耳壺のモデル化が認められた。IIIB 期以降、儀礼用土器群の選択性が急速に再編／創出され、短期間のうちに上下エジプト間で共有された可能性がある。また、神殿址や祭祀遺構における活動の目的が祖先崇拜や死者祭祀あるいは王族関連の儀式に基づくエリート世界の再生産であったとすれば、国家形成の社会的脈絡において儀礼行為の基本（清めの儀礼や供物奉納）それ自体もまた再編・共有された可能性についても今後考えていく必要があるだろう。ただし、ほか関連遺構出土容器の整理、共伴資料を含めた祭祀遺構それ自体の性質の考察、年代観の精緻化など、課題として残すところは多い。

参考文献

- Friedman, R. 2009 Hierakonpolis Locality HK29A: The Predynastic Ceremonial Center Revisited. *Journal of the American Research Center in Egypt* 45: 79-103.
- Jucha, M. 2003 Tell el-Farkha 2001 The Settlement Pottery of Phases 5 and 4a – A Preliminary Report. In L. Krzyżaniak, K. Kroeper and M. Kobusiewicz (eds.), *Cultural Markers in the Later Prehistory of Northeastern Africa and Recent Research*, 185-199. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Petrie, W. M. F. 1914 *Tarkhan II*. London, Bernard Quaritch.
- Sobas, M. 2012 Pottery from the Western Kom. In M. Chłodnicki, M. K. M. Ciałowicz and A. Mączyńska (eds.), *Tell el-Farkha I: Excavations 1998-2011*, 181-197. Poznań and Kraków, Poznań Archaeological Museum.
- Sowada, K. N. 1999 Black-Topped Ware in Early Dynastic Contexts. *The Journal of Egyptian Archaeology* 85: 85-102.

エジプト中王国時代における襟飾りを用いた葬送儀礼の展開

山崎 世理愛

早稲田大学文学学術院 講師

はじめに

エジプト中王国時代（前 2055～1650 年頃）には、来世での再生復活のため死者を神と同一視し、さまざまな葬送儀礼が行われた。その一つが図像や実際のものとして装身具を死者に捧げる儀礼である。本発表では、その主要品目であった襟飾りの種類に着目し、儀礼の展開とその背景を考える。

1. 襟飾りの種類と中王国時代前期の様相（図 1）

箱型棺内面のオブジェクト・フリーズに描かれた襟飾りは、名称やビーズの連なりを両端で束ねるターミナルの形状等から、a. 半円形ターミナル襟飾り、b. ハヤブサ形ターミナル襟飾り、c. 古王国時代の伝統を継ぐ半円形ターミナル旧形襟飾り、d. ロイヤルウセク襟飾りの大きく 4 種類に分けられる。なかでも、半円形ターミナル襟飾りは地域・時期に関係なく最も頻繁に描かれ、88 点の棺に確認された 249 点の襟飾りのうち 73%を占める。一方、他 3 種類には地域性や時期差があり、メンフィス・ファイユーム地域では半円形ターミナル旧形襟飾り、中部エジプト地域ではハヤブサ形ターミナル襟飾りが特徴的なものとして挙げられる。ロイヤルウセク襟飾りはセンウセレット 2 世治世以降に見られ、そのほとんどが中部エジプトの棺であった。中王国時代前期の様相として、とくにハヤブサ形ターミナル襟飾りが中部エジプトで排他的に取り入れられていた点が注目される。また、それらのうち多重棺では、ハヤブサ形ターミナル襟飾りだけ内側の棺に描かれる傾向が看取された。オブジェクト・フリーズ以外にも、中部エジプトではアシュート出土のミイラマスクにもこの種類の襟飾りが見られ、さらにベニ・ハサンの墓からは実物の出土例もある。

2. 中王国時代後期におけるハヤブサ形ターミナル襟飾りの広まり

中王国時代後期にはオブジェクト・フリーズは描かれなくなったが、ミイラマスクや人型棺には襟飾りが描かれ続けた。中部エジプトでは引き続きハヤブサ形ターミナル襟飾りの描写が見られ、王権を象徴するメネス頭巾の装飾が施された数少ない人型木棺に見られることは特筆される。そしてこの頃には、他地域でもハヤブサ形ターミナル襟飾りが用いられるようになった。中心地のメンフィス・ファイユーム地域では、当該地域に特徴的だった古王国時代の伝統を継ぐ襟飾りではなく、社会的地位の高い被葬者を中心にハヤブサ形ターミナル襟飾りを実物として取り入れる動きが見られる。また、南部エジプトでも実際の副葬品として出土しているほか、ハヤブサ形ターミナル襟飾りが描かれた彫像や小像も見つかっている。

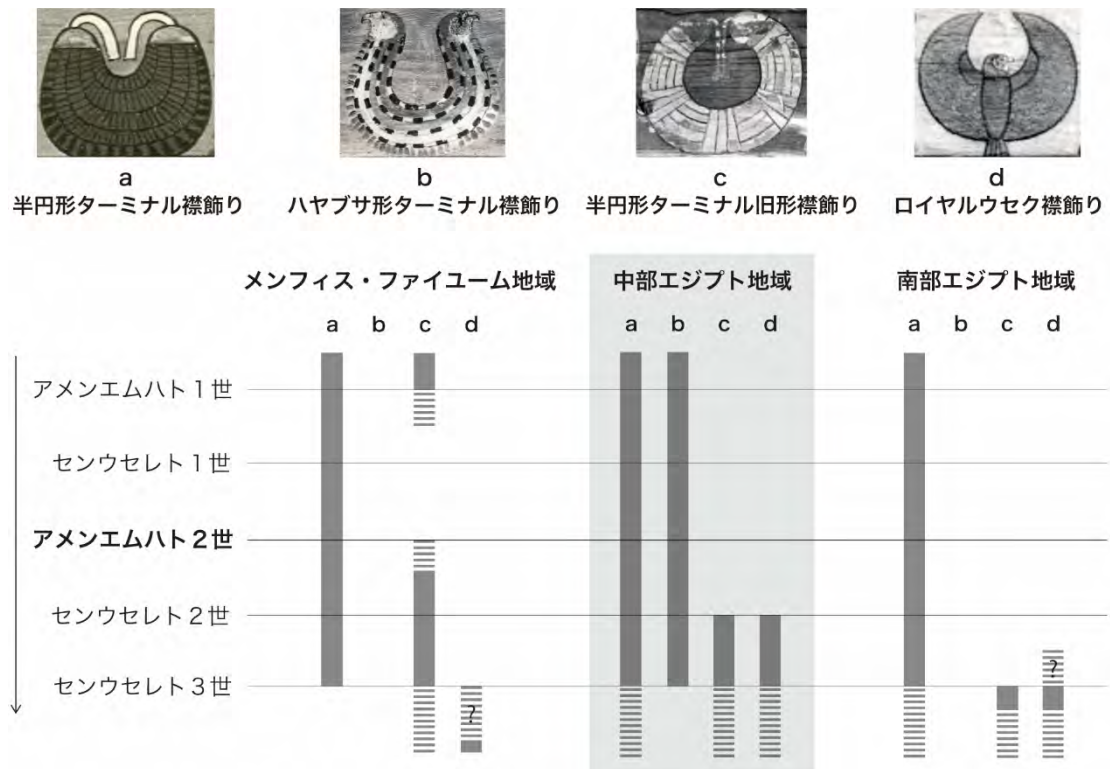


図1 襟飾りの種類とそれらが描かれたオブジェクト・フリーズ（棺）の出土地域・時期
(NINO 所蔵デ・バックのアーカイブ写真 B1C, B4Bo, Sq1Ch, B5C より)

3. 死者と神との同一視における襟飾りの役割

死者は再生復活において、オシリス神と息子のホルス神の双方と同一視される必要があり (Willems 1996: 386)、襟飾りは死者を主にオシリス神と同一視する役割を持つと言われてきた (Grajetzki 2018)。しかし、ハヤブサ形ターミナル襟飾りには「ホルスの襟飾り」という名称が見られることから、ホルス神との同一視とも深く関わったと考えられる。死者と神の同一視という思想は中王国時代後期に強まり、杖や武器など王権の象徴を死者に捧げる儀礼が本格化したことにも反映されている。そうした流れのなかにハヤブサ形ターミナル襟飾りの広まりも位置付けられると言える。中部エジプトでは、とくにオブジェクト・フリーズのなかでいち早く取り入れられ、多重棺の場合は内側の棺つまり被葬者の身体に近い位置に描かれる傾向があった。単なるデザインのちがいではなく、当該地域ではその意味や位置付けも早くから共有していた可能性が考えられる。杖や武器を捧げる儀礼も中部エジプトでいち早く取り入れられ、その後中心地にも広まり、上位層の人びとの紐帯を強化するとともに社会秩序を維持する役割を果たした (山崎 2022)。今後は、襟飾りを捧げる儀礼が当時の社会のなかで果たした役割についても検討していきたい。

参考文献

- Grajetzki, W. 2018 Broad Collars in Late Middle Kingdom Burials. In Hudáková, L., P. Jánosi, C. Jurman, and U. Siffert (eds.), *Art-facts and Artefacts: Visualising the Material World in Middle Kingdom Egypt*, 25–39, London.
- Willems, H. 1996 *The Coffin of Heqata (Cairo JdE 36418): A Case Study of Egyptian Funerary Culture of the Early Middle Kingdom*, Leuven.
- 山崎世理愛 2022 「エジプト中王国時代における器物奉獻儀礼の変容とその社会的背景」『オリエント』65/1: 1–17.

後期青銅器時代のエジプトで流通した外来系黒色磨研土器 ー小型片把手壺の生産地に関する再検討ー

有村 元春

早稲田大学大学院文学研究科 博士後期課程

後期青銅器時代の東地中海周辺地域では、生産地から遠く離れた地にまでもたらされる土器が多数出現した。Black Lustrous Wheel-made Ware ないし Grey Lustrous Wheel-made Ware の名称で知られる黒色磨研土器もその一つとされ、これまでキプロス・レヴァント・エジプトで出土している(図1)。先行研究では、黒色磨研土器はキプロスに起源をもち、紀元前1600～1450年頃にかけて広く流通したことが指摘されている(Yannai 2007)。この土器にはいくつかの器形が存在するが、特に小型片把手壺が多く流通しており、東地中海周辺地域における交易活動を考えるうえで重要となる。本発表では、当時のエジプトとキプロスとの間で行われた交易活動について考えるべく、黒色磨研小型片把手壺に焦点を当てる。

エジプトで出土している黒色磨研小型片把手壺は、オレンによって初めて集成され(Oren 1969)、近年、ヘルブルガーがキプロスからもたらされた土器と位置付けて新たに集成を行った(Hölbürger 2007)。その後、ブッシュネルやジョンストンによって後期青銅器時代の東地中海周辺地域で広く流通した各種土器の分布分析がなされているが、エジプトで出土している黒色磨研小型片把手壺は、全てキプロス製のものとして扱われている(Bushnell 2016; Johnston 2016)。

しかし、黒色磨研小型片把手壺は、キプロス以外の場所でも生産されていたことが明らかになっている。たとえば、ヨルダン川西岸のザワタではレバノン北部で作られた資料が出土している(Eisenstadt et al. 2004)。ヘルブルガーは、土器の表面が「黒色で磨かれている」という情報と器形とを根拠にエジプト出土資料を集成しており、生産地に関する詳細な検討は行っていない。黒色磨研小型片把手壺がキプロス以外でも生産されていたという事実を考慮すると、エジプトで出土した資料全てをキプロス製として分析を行った場合、当時の交易活動の実態を捉え損ねてしまう可能性があるのではないだろうか。

こうした課題から、エジプトで出土している黒色磨研小型片把手壺の生産地については再考の余地があると考えた。そこで、本発表ではヘルブルガーによる集成資料の再確認及び近年新たに報告された資料の集成を通して、当時のエジプトとキプロスとの交易を考えるうえで、黒色磨研小型片把手壺がどの程度の有用性をもつのかについて検討した。

その結果、エズベト・ヘルミ、テル・エル＝ラターバなどの遺跡においては、在地の胎土で作られた個体も出土していることが判明した。また、多数の黒色磨研小型片把手壺が出土していることで知

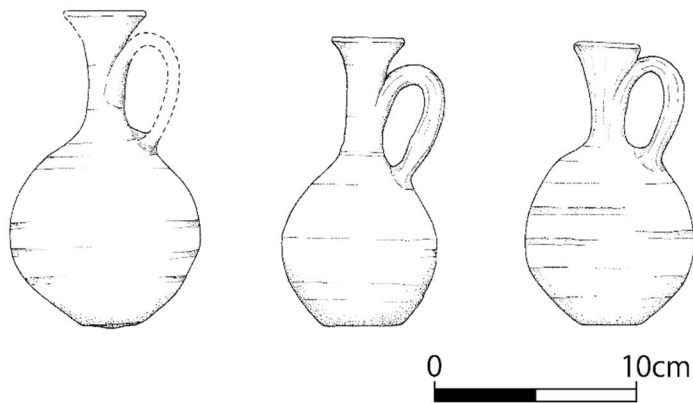


図1 エジプト出土の黒色磨研小型片把手壺
(Helmbold-Doyé and Seiler 2019: 368)

られるアニバにおいても、近年の再調査によって在地製の可能性がある資料の存在が示唆されていることがわかった。一方で、古い報告書に掲載されている資料など、詳細な報告がなされていないものについては判断が難しく、多くの資料については生産地を特定することができなかった。そのため、エジプトで出土している黒色磨研小型片把手壺のうち、実際にキプロスで生産されたものがどの程度存在するのかを本発表で正確に示すことはできない。ただし、少なくともエジプトで出土している黒色磨研小型片把手壺をすべてキプロス製だとみなすことはもはや不可能であり、これまで器形と表面の特徴を根拠にキプロス製と判断されてきた個体も、実際にはキプロス以外の場所で生産されたものであるという可能性を捨てきれないのではないだろうか。したがって、エジプトとキプロスとの交易活動の復元に黒色磨研小型片把手壺を用いるには、実物の観察や胎土分析など、さらなる調査が必要である。

そして、黒色磨研小型片把手壺の生産がキプロス以外においてはレヴァント南部の特定の地域に限定されているという見解が先行研究では示されているが (Bushnell 2016: 120)、実際にはエジプトを含めて広範囲で行われていたと認識を改めなければならない。当時の東地中海周辺地域における黒色磨研小型片把手壺の位置付けには再考の余地があるといえよう。

参考文献

- Bushnell, L., 2016, *Precious Commodities: The Socio-economic Implications of the Distribution of Juglets in the Eastern Mediterranean during the Middle and Late Bronze Age.*, Oxford.
- Eisenstadt, I., Arabas, K., Ablas, Z., 2004, "A Late Bronze Age Burial Cave at Zawata" in Hizmi, H. and De-Groot, A. (eds.), *Burial Caves and Sites in Judea and Samaria: From the Bronze and Iron Ages.*, Jerusalem, pp. 77–106.
- Helmbold-Doyé, J. and Seiler, A., 2019, *Die Keramik aus dem Friedhof S/SA von Aniba (Unternubien).*, Berlin and Boston.
- Hörburger, J. O., 2007, "Black Lustrous Wheel-Made Ware in Egypt: The Distribution of a Cypriot Import" in Hein, I. (ed.), *The Lustrous Wares of Late Bronze Age Cyprus and the Eastern Mediterranean.*, Wien, pp.107–114.
- Johnston, C.L., 2016, *Networks and Intermediaries: Ceramic Exchange Systems in the Late Bronze Age.*, unpublished dissertation.
- Oren, S. E., 1969, "Cypriot Imports in the Palestinian Late Bronze I Context", *Opuscula Atheniensia* 9: 127–150.
- Yannai, E., 2007, "New Typology and Chronology of the Grey Lustrous Wheel Made Ware in Israel", *Ägypten und Levante* 17: 295–321

エジプト新王国時代のシャフト墓のタイプ分類試論

矢澤 健¹⁾、吉村 作治²⁾

1)東日本国際大学エジプト考古学研究所 客員教授 2)東日本国際大学 総長・教授

本発表は、「古代エジプト新王国時代のメンフィス編年の構築とテーベとの比較研究」(日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(B)、研究代表者:吉村作治)の一環として進められている、ダハシュール北遺跡における新王国時代のシャフト墓のタイプ分類と、その通時的変化に関する試論である。

新王国時代の墓の多くは、地下の空間が広く設けられ、追葬・再利用に伴う改変や墓どうしの結合が認められる。そのため構造が複雑であり、ほぼ全てが盗掘されているため、いつの段階でどう変化したのかが捉えにくい。サッカラのウナス王ピラミッド参道の南に位置する高官墓群など、当時の大型墓については特にこの問題が当てはまる。これに対して、発表者らが調査するダハシュール北遺跡で発見されたシャフト墓群は少数の例外を除いて比較的シンプルで小型であり、使用された期間も比較的短いと推測される。そのため、シャフト墓の通時的変遷を追いやすいという特徴がある。

ダハシュール北遺跡のシャフト墓の分類案を図1に示す。墓はまず、シャフト(竪穴)部の平面が南北に長い方形のタイプ(NS)と東西に長い方形のタイプ(EW)の2つに大別される。地下の部屋の平面はほとんどが方形を呈し、EWではシャフトに対して西側に部屋が掘削された例(-w)、東側に掘削された例(-e)、両方に掘削された例(-e,w)などがあり、まれに北側(-n)、南側(-s)に小部屋が設けられた例がある。NSの場合は南(-s)と北(-n)に部屋を持つ例があり、東西方向に部屋が掘削された例は今のところ認められない。地下の部屋には付属室が造られた例があり、これに関しては掘削方向を問わず+を追記した。例えば、東西方向のシャフトで東側に部屋が掘削され、その部屋に付属室がある場合はEW-e+と表記する。また、地下2階の構成を持つシャフト墓が少数あり、これらは上記の単位の繰り返しとして記述される。例えば、EW-e+の東側の部屋からさらに地下に続く竪穴(平面は東西に長い)が掘削され、底から東方向に部屋が造られていたとしたら、EW-e+(1階)とEW-e(2階)の組み合わせになる。なお、通廊によって部屋が接続され、より複雑な構成を持つ大型の2基(シャフトA、23号墓)については、例外として本研究では一旦除外した。

2023年までに発見された43基を対象に分類を実施した。そして各墓の時期については、墓から発見されたアンフォラを中心とする土器の年代を主に参考にした。アンフォラについては、上記研究課題の研究分担者高橋寿光によって編年が実施されている。時期を提示することができた墓は24基あった(表1)。その結果として、第18王朝後期から第19王朝中期にかけては、シャフト部の方位はNSとEWの両方があり、EWでは部屋が掘削される方向が東(-e)、西(-w)、南(-s)など、シャフト部の方位、部屋の掘削方向ともにランダムな印象を受ける。一方で第19王朝後期から第20王朝にかけては、EWに限定され、部屋は西側を指向する墓が多く認められた。EW-e,w+のように東側にも

部屋が造られた例（125、15号墓）があるが、この2例は西側の最奥部に石槨を伴う特別な玄室が設けられており、掘削当初から西側に重点が置かれた配置計画だったことが窺える。地下2階に拡張された墓であっても、部屋は基本的に西側に展開しており、東側に拡張するという選択は採られていなかった。したがって、第19王朝後期以降、埋葬室を西側に設けることが理想的と考えられていた可能性が示唆された。

こうした部屋の配置に見られる指向性と当時の葬送観念との関連については、今後の検討課題としたい。

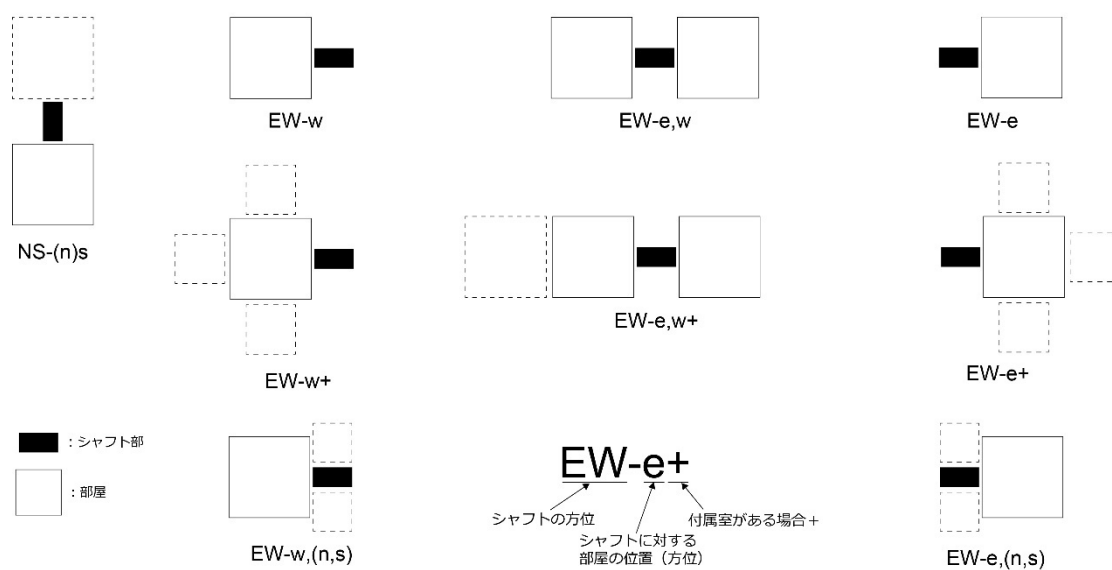


図1 ダハシュール北遺跡のシャフト墓のタイプ分類

表1 各時期におけるシャフト墓のタイプの構成

年代	タイプ	該当するシャフト番号	備考※
18王朝後期	NS-n,s	27, 30, 142	
	EW-e	137, 174	
	EW-e+	185	2段目 EW-e
	EW-w	84, (162?)	
	EW-w+	13, 14	
	EW-e,w	17, 24	17: 2段目 EW-e
18王朝後期～19王朝中期	EW-w,s	88	
ポストアマルナ～19王朝中期	NS-n,s	167	
	EW-w+	25	2段目 EW-w
19王朝後期～20王朝初期	EW-w	21, 39	
	EW-w+	47, 90, 105	47: 2段目 -w+
	EW-e,w+	125	
20王朝中期～20王朝後期	EW-w+	40, 110	40: 2段目 -w+
	EW-e,w+	15	

※2段目にEWなどのシャフトの表記がある場合、埋葬室から下層への縦穴が掘られている。
シャフトの表記がなく、-w、-w+だけの場合は1本のシャフトに2つの階層がある。

古代エジプトにおけるハリネズミ： その信仰と権能

花坂 哲

東京都立大学 客員研究員

エジプト中部に位置するアコリス (Akoris) 遺跡南地区の 2019 年度調査で、直径 8.3 cm ほどの円形を呈したハリネズミの皮が出土した。背中の「針」は残っておらず、頭部と尾部が切り取られ、四肢に亜麻ヒモが結ばれていた (図 1)。これは土器の蓋として用いられたものと推察される。ハリネズミは危険を感じると体を丸めて防御の姿勢を取る習性があるため、古代エジプトにおいては保護や厄除けの象徴性を持っていたと考えられており、貴重品を保管した土器にハリネズミの皮で蓋をしていたのだろう。

さて、メソポタミアにおける動物形土器の最古級の例は前七千年紀後半まで遡るが、そのうちの一例がシリア東部のテル・ブクラス (Tell Bouqras) 遺跡出土のハリネズミを象った土器である。一方、エジプトにおいてハリネズミが図像に描かれたり、製品のモチーフとして用いられるのは、前四千年紀のナカダ期の土器が初現とされる。しかし、確実にハリネズミと認識できる資料は古王国時代になってから登場する。古王国時代の墓のレリーフには、郊外でのガゼルやレイヨウなどの狩猟場面が描かれ、そこに野ウサギやハリネズミなどの小動物が登場することがある。また、供物とするハリネズミを籠に入れて運んでいる場面も複数例が知られている。ただし、考古資料と文字史料の双方においてハリネズミを食糧としていた確証はなく、ハリネズミを供える意味は他にあったと考えるほうが良い。それがハリネズミの防御姿勢から導かれる保護や厄除けの象徴性であり、ハリネズミは死者を護るための供物であった可能性がある。さらに、ハリネズミは夜行性であり、太陽が沈むと姿を現し、太陽が昇ると巣穴に戻る。ボール状に丸まる習性や墓地が多く造られた砂漠縁辺部に生息していたことなどから、太陽信仰や再生復活の思想と関連付けて解釈されることもある。

加えて、古王国時代の墓のレリーフには、進行方向に背を向けて、体を丸めたハリネズミの頭部を象った船首を持つ船が描かれている例がある。また、同様の船首を持つ、ファイアンス製や土製の小さな模型船も知られている。ハリネズミが水に浮く時の姿勢と、船首と船尾が持ち上がった古代エジプトの船の外観は似ていると言えるかもしれないが、ハリネズミは泳ぎが得意な動物ではない。こうした意匠の船は古王国時代にしか知られておらず、ハリネズミを船首に設えた理由は定かでないものの、太陽信仰および太陽の船との関係が指摘されている。

中王国時代から新王国時代になると、保護や厄除けを願ったと考えられるハリネズミ形の小さな護符が数多く作られた。ハリネズミは昆虫を主食とするが、人間に危害を及ぼすサソリやヘビの毒に耐性を持ち、それらを捕食することもあるという。こうした点も護符として好まれた要因の一つであったのだろう。また、新王国時代の医術パピルスであるエーベルス・パピルスには、ハリネズミの針を粉にして、油と混ぜて塗り込むことで薄毛対策に効果が得られると記されている (P. Ebers #466, 771)。



図1 アコリス遺跡出土のハリネズミの皮



図2 バンネンティウ墓に描かれたアブアセット女神

前6世紀には、アリュバルロス (aryballos) と呼ばれる、ファイアンス製または施釉陶製の小型の香油壺が東地中海全域で流行した。さまざまな意匠や形状が存在するなかで、特にハリネズミを象ったものが人気を博した。ハリネズミ形アリュバルロスは、ギリシア系住民の居住地であったデルタ西部のナウクラティス (Naukratis) 産とされることが多いものの、ナウクラティス産と明確に分かる資料は限定される。ナウクラティスはアナトリア半島南西部のポリスとの繋がりが強く、当該地域ではハリネズミ形土器が出土しているため、ハリネズミ形アリュバルロスはハリネズミ形土器から着想を得て作られたという指摘もある。しかし、どちらが先行していたのか、製作者がエジプト人またはギリシア人であったのかは不明である。そして、ギリシア地域においても、ハリネズミを容器のモチーフにした理由は判然としていない。

ところで、古代エジプトでは神々の頭部がさまざまな動物の姿で表されたり、頭上にシンボルを戴いていたことが広く知られている。頭部全体がハリネズミで表された神は存在しないものの、ハリネズミを頭上に戴いた女神が存在する。一般に存在がほとんど知られていないこの女神はアブアセット (Abaset) という名を持ち、バハレイヤ・オアシス (Bahariya Oasis) にある末期王朝時代第26王朝の2つの墓の壁画にのみ登場する (図2)。計3例の図像が残っており、うち2例は、バハレイヤ・オアシスの最大都市であるバウーティ (el-Bawiti) 市の中心部に位置するバンネンティウ (Bannentiu) の墓に描かれており、もう1例は、バウーティ市の中心部から20kmほど東に位置するハッラ (el-Harrah) 村にある被葬者不明の墓に残る。現在も完全な形でアブアセット女神の姿を確認できる図像はバンネンティウ墓の2例中1例のみであるが、報告書の図版などを見る限り、3例とも同じ衣装と頭飾りを着用している。ラー・ホルアクティ神あるいはバネブジェデト神の配偶神として描かれたアブアセット女神は、赤いチュニックドレスを身に纏い、額にウラエウスが付いた羽を広げたハゲワシの頭巾を被り、その上にハリネズミを戴く。イシス女神との関連性が指摘されているものの、アブアセット女神の権能は不明であり、地域的、時代的な広がりも分かっていない。

このように王朝時代を通じてハリネズミは意匠として利用され、途切れることなく人びとに支持され続けた動物である。しかし、詳述はしないが、ハリネズミを負の象徴として捉えた説もあるため、古代エジプト人がどのような象徴性をハリネズミに与えていたのかについて、地中海世界におけるハリネズミの象徴性も考慮しながら再検討していく必要があるだろう。

「西アジア考古学」の範囲は高等学校でどのように教えられるか 新しい学習指導要領と教科書より

南澤 武蔵

東京大学教育学部附属中等教育学校
東京大学芸術創造連携機構 客員フェロー

1. 平成 30 年の高等学校学習指導要領改訂

学校（小・中・高等学校）で教える内容とその扱いは文部科学省が定める学習指導要領によって決められている。この学習指導要領は約 10 年ごとに時代に合わせて改訂される。現行の高等学校の学習指導要領改訂は平成 30 年告示によるものであり、昨年度より施行されている。歴史科目においては改訂前の必修科目「世界史 A」と選択科目である「日本史 A」が廃されて、新たな必修科目として「歴史総合」が設置された。また「世界史 B」「日本史 B」はそれぞれ「世界史探究」「日本史探究」とされた。この改訂がどのような影響を与えるかの予測についてはこれまでも指摘をしてきた（南澤 2020: 256）。本発表では探究科目の「世界史探究」が開始されたこと、そして調査団の人手不足の指摘（三宅 2023: 3）を受け、改めて高校生が「西アジア考古学」の範囲にどのような接点をもち学んでいけるのかを検討するものである。

2. 高校生と「西アジア考古学」の接点

第 30 回西アジア発掘調査報告会の報告集の巻頭で、三宅裕会長がこれまでの報告会での国別の報告件数を 10 年ごとにまとめて示している（三宅 2023: 2, 3）。それによると、西はブルガリアから東はパキスタンまで、南はエジプトから北はキルギスに広がっており、同報告集の日本隊が発掘調査をした遺跡地図も同様の範囲を示している（西アジア考古学会 2023: 8）。この該当地域を「西アジア考古学」の範囲とした時、高校生は旧課程であれば世界史 B、新課程であれば世界史探究において「人類の誕生」や「文明の成立」などを含めて世界の歴史を網羅的に学習する中でこの範囲にふれる。しかし、世界史 B や世界史探究は選択科目であるため、必ずしも全高校生が学ぶわけではない。

また、平成 30 年告示の学習指導要領の改訂は、「何を学ぶか」というコンテンツよりも「何ができるようになるか」のコンピテンシーを重視することが明確に示された。すべての教科・科目に対して何をできるようにするかが示されており、地理歴史科においては社会的事象に対する「歴史的な見方・考え方を働かせ」て「資質・能力の育成をする」ことが目標に掲げられている。そのため、各科目で扱う内容は上記を達成するために必要な素材として学ばれることになる。この変化の中で新科目の歴史総合は学習指導要領の記述において旧課程の世界史 A には含まれていた近代以前の扱いがなくなった。

学習指導要領に記載がないことは検定教科書においても記載の必要がない。そのため、教科書会社は各社が本篇前の資料編として近代以前の諸地域を地域ごとに掲載をすることもあるが、「古代」がま

まったく掲載されていない教科書もある。つまり、昨年度以降に高校に入学した生徒たちが手にする教科書には西アジア考古学の範囲に関連した項目がないため、世界史探究を選択しない限りは中学校で学習した内容以上のものに触れる機会はなく、教科書で目にする機会すらなくなっている。

3. 西アジア考古学の範囲と高校歴史科目での学び

世界史探究は旧課程の世界史Bを継承した科目であり、科目の性格は異なるが、教科書で扱われる内容自体に大幅な変更はなく、世界史探究選択者については従来通り西アジア考古学が範囲とする歴史についても学ぶ機会がある（図1）。また、学習指導要領には「指導計画の作成に当たっては、自然環境を生かした人々の生活や文化、宗教等に触れたり、今日に伝えられる建築や美術等の文化遺産を取り上げたり、博物館やその他の資料館等と連携を図るなどしたりして、古代文明の形成に関わる歴史の様相をイメージ豊かに捉え、その学習の中から、生徒が古代文明の歴史的特質を見いだすことができるように工夫することが求められる」と記されている（文部科学省 2018: 295）。西アジア考古学はこの部分で、教科書の記述や問いに対して多面的・多角的に考察させる資料を求める今日教育現場に有益な情報を提供できる。

また、歴史総合は既に指摘している通り近現代が中心ではあるが、西アジア考古学の範囲が関わらないわけではない。歴史総合も内容を教えることではなく、歴史的事象の見方・考え方を通した資質・能力の育成が科目の目標とされている。その際に、多面的・多角的に考察する資料には「西アジア考古学」の研究者の力添えが必要だと考える。例えば現代史における「イスラーム国（I S I S）」の学習に関連しては「歴史遺産の破壊」の観点において調査現地に赴いていた研究者からの声が生徒にとっては貴重な資料となる。多角的・多面的に考察する資料が求められていることで、新課程の世界史探究において、そして歴史総合においても西アジア考古学の研究者からしか得られない情報を通して高校生が「西アジア考古学」に触れる機会が生まれる。

参考文献

- 木村靖二・岸本美緒・小松久男・橋場弦（編著）2023『詳説世界史 世界史探究』山川出版社。
 西アジア考古学会（編）2023『第30回西アジア発掘調査報告会報告集 令和4年度考古学が語る古代オリエント』日本西アジア考古学会。
 南澤武蔵 2020「第5部会 7. オリエント文明の高校世界史における今後について：時期学習指導要領とその変化」『オリエント』第63巻第2号、256頁。
 三宅 裕 2023「第30回西アジア発掘調査報告会の開催にあたって」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集 令和4年度考古学が語る古代オリエント』西アジア考古学会編、日本西アジア考古学会、2-3頁。
 文部科学省 2018『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 地理歴史編』文部科学省。

第1部 諸地域の歴史的特質の形成	15
● 第1部を学ぶ前に	16
第1章 文明の成立と古代文明の特質	18
1 文明の誕生	18
2 古代オリエント文明とその周辺	20
3 南アジアの古代文明	28
4 中国の古代文明	30
5 南北アメリカ文明	35
第2章 中央ユーラシアと東アジア世界	37
1 中央ユーラシア—草原とオアシスの世界	37
2 秦・漢帝国	40
3 中国の動乱と変容	44
4 東アジア文化圏の形成	47
第3章 南アジア世界と東南アジア世界の展開	54
1 仏教の成立と南アジアの統一国家	54
2 インド古典文化とヒンドゥー教の定着	58
3 東南アジア世界の形成と展開	60
第4章 西アジアと地中海周辺の国家形成	63
1 イラン諸国家の興亡とイラン文明	63
2 ギリシア人の都市国家	66
3 ローマと地中海支配	75
4 キリスト教の成立と発展	83
第5章 イスラーム教の成立とヨーロッパ世界の形成	85
1 アラブの大征服とイスラーム政権の成立	85
2 ヨーロッパ世界の形成	91
第1部まとめ	102

図1 山川出版社『詳説世界史 世界史探究』
第1部の項目（木村他 2023より作成）

南ヨルダン、Tor Faraj 遺跡における中部旧石器技術の 多様性と理化学年代

門脇 誠二¹⁾、田村 亨²⁾、木田 梨沙子³⁾
廣瀬 允人⁴⁾、須賀 永帰⁵⁾、西秋 良宏⁶⁾

1)名古屋大学博物館 教授 2)産業技術総合研究所地質情報研究部門 上級主任研究員 3)名古屋市科学館 学芸員
4)木曽広域連合埋蔵文化財調査室 研究員 5)名古屋大学大学院 大学院生 6)東京大学総合研究博物館 教授

南ヨルダンのトール・ファラジ (Tor Faraj) 岩陰は、レヴァント地方の最南端に位置する中部旧石器時代後期の遺跡である。レヴァント地方の中部旧石器時代後期（およそ 7.5 万～4.8 万年前）は、アムッド (Amud) 洞窟やケバラ (Kebara) 洞窟、デデリエ (Dederiyeh) 洞窟などからネアンデルタール人骨が発見されており、ヨーロッパからネアンデルタール人が南下したと解釈されている。一方で、古代ゲノム研究によると、ホモ・サピエンスの一部が出アフリカしネアンデルタール人と交雑したタイミングが 5.4 万～4.9 万年前で、やはり中部旧石器時代後期に相当する。この推定を支持する化石記録として、マノット (Manot) 洞窟で発見されたホモ・サピエンスの頭骨が 5.5 万年前に年代づけられた。このように、レヴァント地方の中部旧石器時代はネアンデルタール人とホモ・サピエンスが共存していた可能性があり、人類進化史の研究において重要な場所と時代である。

トール・ファラジ遺跡は 1980～90 年代にドナルド・ヘンリー (Donald O. Henry) によって発掘調査された。人骨は発見されていないが、当時の人類が岩陰に居住して残した多数の炉跡や石器、花粉、プラントオパールが調査され、2 つの居住面 (Floor 1 と Floor 2) の空間構造や石器技術などに関して詳細に研究された (Henry 1995, 2003)。トール・ファラジの石器技術は、中部旧石器後期に典型的な幅広い形態のルヴァロワ・ポイントの製作が特徴と知られている。この特徴は伝統的に「タブン B 型」と呼ばれているが、それと異なる石器形態や製作技術を示す石器群の報告が増えてきた。しかし、そうした多様性に明確な時間的空間的パターンが認められるかどうかについては未だ明らかになっていない。

本発表は、2017～18 年に発表者らが実施したトール・ファラジ遺跡の再発掘 (4 m²) によって発見された新たな石器群、および堆積物の光ルミネッセンス年代について報告する (Kadowaki and Henry 2019; 門脇ほか 2018)。新たな石器群は、ドナルド・ヘンリーが以前に調査した C 層 (Floor 1) と D2 層上部 (Floor 2) よりも下に位置する D2 層下部と E 層から収集された (それぞれ 58 点と 1051 点)。5 cm の厚さの任意レベルごとに石器の分布密度を比較すると、E 層の石器分布密度は D2 層下部より高く、C 層や D2 層上部の石器分布密度に相当することが分かった。また、デビタージュに対する二次加工石器の比率を任意レベルごとに比較すると、その比率は D2 層下部で高く、逆に C 層と D2 層上部および E 層で低いことが明らかになった。この結果は、たくさんの炉跡や石器が分布した C 層や D 層上部と同様な居住址が E 層にもあった可能性を示すと考えられる。この推測は、E 層で炭化材や灰の集中部が認められたことと整合的である。

E 層の石器群は、C 層～D2 層上部 (Floor 1 と Floor 2) の石器群と同様にルヴァロワ方式による製作技

術が主体であるが、ルヴァロワ製品におけるポイントの比率が低い (11%)。それに対し C 層は 25%、D2 層上部は 15% と高い。また、石核作業面の剥離方向は C 層～D2 層上部において単方向が主体 (70～90%) なのに対し、E 層では単方向が 24% に留まり、対方向 (43%) と求心/直行方向 (34%) が主体である。こうした技術形態特徴は、中部旧石器中期 (いわゆるタブン C 型) との類似性を示すが、その代表例として知られるカフゼー (Qafzeh) 洞窟の石器群に比べると、ルヴァロワ剥片や求心方向剥離の頻度がやや低い。

光ルミネッセンス年代測定は、新たに調査された D2 層下部と E 層だけでなく、以前の発掘区のセクションに露出していた C 層と D2 層上部に対しても行われた。その結果、C 層下部から 2 点 (62.3 ± 5.7 ka、 53.2 ± 3.4 ka)、D 層上部から 1 点 (57.2 ± 3.5 ka)、D 層下部から 1 点 (63.9 ± 5.7 ka)、E 層から 3 点 (56.1 ± 3.6 ka、 65.9 ± 4.2 ka、 65.0 ± 4.2 ka) の年代が得られた。層序と整合的でない年代もあるが、新たに調査された D2 層下部や E 層も含めて全ての年代が中部旧石器時代後期の範囲に入る。

結果として、トール・ファラジ E 層石器群は中部旧石器後期に典型的なタブン B 型とは異なり、より古いタブン C 型 (中部旧石器中期) に類似する特徴を含むが、E 層の年代は中部旧石器後期に相当する。この類例としてケバラ洞窟 V 層の石器群が挙げられるが、トール・ファラジ E 層石器群とは出現時期が異なる。ケバラ洞窟 V 層の石器群は、ルヴァロワ・ポイントが特徴のタブン B 型石器群 (Kebara IX-X 層) よりも上位で 4.9 万～4.8 万年前の年代なのに対して、トール・ファラジ E 層石器群は、ルヴァロワ・ポイントが特徴の C 層～D2 層上部石器群よりも下の層に位置し、6.6 万～5.6 万年前の年代である。また、ケバラ洞窟やフンマル遺跡では、ルヴァロワ・ポイントが卓越する石器群の下に、石刃が比較的多い石器群 (Kebara XI-XII 層と HM-A2) が報告されているが、そうした石器群はトール・ファラジでは見つかっていない。このように、トール・ファラジにおける石器技術の層序変化は、中部旧石器後期においてユニークである。類似する可能性がある唯一の事例が、アムッド洞窟の B4 層から B2 層にかけての変化である。

トール・ファラジ遺跡が位置する乾燥地帯は開地遺跡が多く、石器群の層位的出土例が少ない。乾燥地帯における石器技術の層位的変化はこれまで、シリアのドゥアラ (Douara) 洞窟やフンマル遺跡、ウム・エル・トゥレル (Umm el-Tlel) 遺跡で知られていたが、ヨルダンやネゲヴなど南部の乾燥地帯では記録が乏しかった。本研究によって新たに追加されたトール・ファラジ遺跡の石器層序は、中部旧石器後期における石器製作行動が、地中海地帯だけでなく乾燥地帯においても多様で変化に富んだという見解を支持するものである。この多様性が当時の人類集団の多様性や文化伝達および環境適応とどのように関わったかという点について今後の研究が必要である。

参考文献

- Henry, D.O. 1995 *Prehistoric Cultural Ecology and Evolution*. New York, Plenum Press.
- Henry, D.O. 2003 *Neanderthals in the Levant: Behavioral Organization and the Beginnings of Human Modernity*. London, New York, Continuum.
- Kadowaki, S. and D.O. Henry 2019 Renewed investigation of the Middle and Upper Paleolithic sites in the Jebel Qalkha Area, southern Jordan. In S. Nakamura, T. Adachi, and M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii.*, 23–41. Tokyo, Rokuichi Syobou.
- 門脇誠二・D.ヘンリー・S.マサデ・廣瀬允人 2018 「ホモ・サピエンスの拡散・定着期における文化動態 —ヨルダン、カルハ山の旧石器遺跡調査 (2017 年) — 『第 25 回西アジア発掘調査報告会報告集』 39–43 頁。

レバント地方の終末期旧石器時代における 貝製ビーズのネットワーク分析

木元 菜奈子¹⁾、門脇 誠二²⁾

1)名古屋大学大学院 大学院生 2)名古屋大学博物館 教授

西アジアのレバント地方では、農耕牧畜が発達した新石器時代以降に社会交流やネットワークが複雑化・多様化したと一般に考えられており、新石器時代における社会交流の研究が多く行われてきた。しかし社会交流は、新石器時代の直前である終末期旧石器時代（約 2.3～1.2 万年前）からすでに発達したことが次第に明らかになってきた。その証拠として、貝殻を素材にした装飾品（ビーズ）が着目されている。しかし、その後の新石器時代における社会ネットワークとの違いを貝製ビーズの利用状況に基づいて比較・考察した研究は稀で（三宅 2022 など）、その違いを定量的に検証した例はほとんどない。そこで本研究では、終末期旧石器時代の新石器時代の特徴を貝製ビーズの流通に基づいて定量的に検証し、新石器時代のデータとも比較しながら考察を行う。

本研究では、終末期旧石器～新石器時代の中でも特に多くの貝殻資料が得られる、終末期旧石器時代後期（Late Epi）と先土器新石器時代 B 期（PPNB）の 2 時期に着目する。各時期の遺跡について、過去の出版情報をもとに貝殻データを収集・整理し、レバントでどのような種類の貝殻が流通していたのかを明らかにした。また当時の集団間でどのようなつながりが形成されていたかを詳細に調べるため、2 時期の遺跡を対象にネットワーク分析を行った。本分析を行うため、まず貝殻データを生物学的分類に基づいて分け、各科の貝殻の頻度を遺跡ごとに算出した。それをもとに、任意の 2 遺跡間における貝殻の組成（頻度）データの類似性を定量的指標で表した。本研究では、Brainerd-Robinson coefficient of similarity（Robinson 1951）と呼ばれる類似度指標を採用した（以後 BR 値と呼ぶ）。算出された BR 値に応じて、遺跡のプロット同士を異なる太さの線で結び、類似度を加味したネットワーク図の作成を行った。

その結果、Late Epi の方が PPNB よりも全体的に BR 値が高い傾向にあり、紅海沿岸地域から地中海沿岸地域まで、より広い地域にわたって強い結びつきが形成されていた可能性が高いことがわかった。本発表では、各時期における分析結果を詳細に示しながら、Late Epi の社会ネットワークの特徴や 2 時期で違いが生じた要因などを考察する。

参考文献

- Robinson, W.S. 1951 A Method for Chronologically Ordering Archaeological Deposits. *American Antiquity*, vol. 16, no. 4: 293–301.
- 三宅 裕 2022「西アジア先史時代における貝製装身具—その起源から先土器新石器時代まで—」『西アジア考古学』23 号 1-17 頁。

南コーカサス中石器・新石器時代の幾何学形細石器

西秋 良宏

東京大学総合研究博物館 教授

レヴァント、アナトリア地方新石器時代の編年構築においては、打製石器、なかんづく狩猟具たる尖頭器の形態的、技術的特徴の解析が主要な役割を果たしてきた。打製石器は先土器時代をふくめて長期的な文化進化を一環した視点から追跡できる有用な人工物であること、さらには旧石器時代以来、主要な生業であり続けた狩猟のありようが当時、大きく変化しつつあったことなどが、その背景にある。この発表で扱う南コーカサス地方には尖頭器はほとんどないが、幾何学的細石器が中石器時代から新石器時代において狩猟具として用いられていた。アゼルバイジャンで演者らが調査した三つの遺跡出土資料の分析結果にもとづき、幾何学石器を編年構築に用いる可能性について述べる。

三遺跡、すなわち、ダムジリ洞窟、ハッジ・エラムハンル・テペ、ギョイテペは全てアゼルバイジャン西部、クラ川流域に位置する。いずれも中石器時代から新石器時代にかけての文化変化を調べるにふさわしい時期の堆積を包含している。ダムジリは前 6500～6000 年の中石器、前 6000～5300 年の新石器時代双方の堆積をもつ洞窟遺跡である。一方、ハッジ・エラムハンル・テペは前 5950～5800 年、ギョイテペは前 5640～5450 年に位置づけられる新石器時代集落である。これらのデータを総合すれば、居住形態の違いによる機能的変異を考慮しつつ、石器群の技術形態的変遷を追跡することができる。

2008 年～2022 年までの発掘調査で得られた幾何学形細石器群を分析してみると、原石利用、石器形態、二次加工技術とも、あきらかな編年的変化を遂げていることが確認できた。最大の変化はチョク遺跡型、半月形型、台形型、三角形型など多様な形態をみせていた中石器時代の幾何学石器が、新石器時代になると急速に単純化し、ほぼ台形型に限定されるようになることである（図 1）。

この変化は、三つの点で興味深い。第一は、幾何学細石器の型式は、南コーカサス中・新石器時代の編年構築に資するということである。第二は、それらの変化は、この時期にすすんだ狩猟の衰退と機を一にしている点である。中石器時代に幾何学細石器の形態が多様であった事実は、当時、複雑な組み合わせ型狩猟具が用いられていたことを示唆しており、新石器時代にはそれらが放棄され単純な狩猟具におきかわったことが考えられる。そして、第三には、この種の変化はいわゆる肥沃な三日月地帯の東翼で広く進行していた石器変化と一致している点が重要である。既にイラン南部で、ほぼ同じ時期に類似の事象があったことが報告されている。南北 1000km を超える広大な地域で似たような石器群変化が起きていたことは注目に値しよう。この結果は、南コーカサスの新石器化は西アジア一帯の新石器化の枠組みの中で理解すべきことを改めて示している。

参考文献

- Masashi, A. (2011) Geometrics from the Neolithic settlement of Tall i Mushki, south-west Iran. In: *State of the Stone, Stone Terminologies, Continuities, and Contexts in Near Eastern Lithics*, edited by E. Healey, S. Campbell and O. Maeda, pp. 163–170. Berlin: ex oriente.
- Kadowaki, K. (2021) Neolithic chipped stone artifacts from Hacı Elamxanlı Tepe. *Hacı Elamxanlı Tepe – The Archaeological Investigations of an Early Neolithic Settlement in West Azerbaijan*, edited by Y. Nishiaki, F. Guliyev and S. Kadowaki, pp. 59–96. Berlin: ex oriente.
- Nishiaki, Y., A. Zeynalov, M. Mansrov, C. Akashi, S. Arai, K. Shimogama, and F. Guliyev (2019) The Mesolithic-Neolithic Interface in the Southern Caucasus: 2016–2017 Excavations at Damjili Cave, West Azerbaijan. *Archaeological Research in Asia* 19: 100140.
- Nishiaki, Y. and F. Guliyev (2020) *Göytepe – The Neolithic Excavations in the Middle Kura Valley, Azerbaijan*. Oxford: Archaeopress.
- Nishiaki, Y., F. Guliyev and S. Kadowaki (2021) *Hacı Elamxanlı Tepe – The Archaeological Investigations of an Early Neolithic Settlement in West Azerbaijan*. Berlin: ex oriente.
- Nishiaki, Y., A. Zeynalov, M. Munsrov, and F. Guliyev (2022) Radiocarbon Chronology of the Mesolithic-Neolithic Sequence at Damjili Cave, Azerbaijan, Southern Caucasus. *Radiocarbon* 64(2): 309–322.

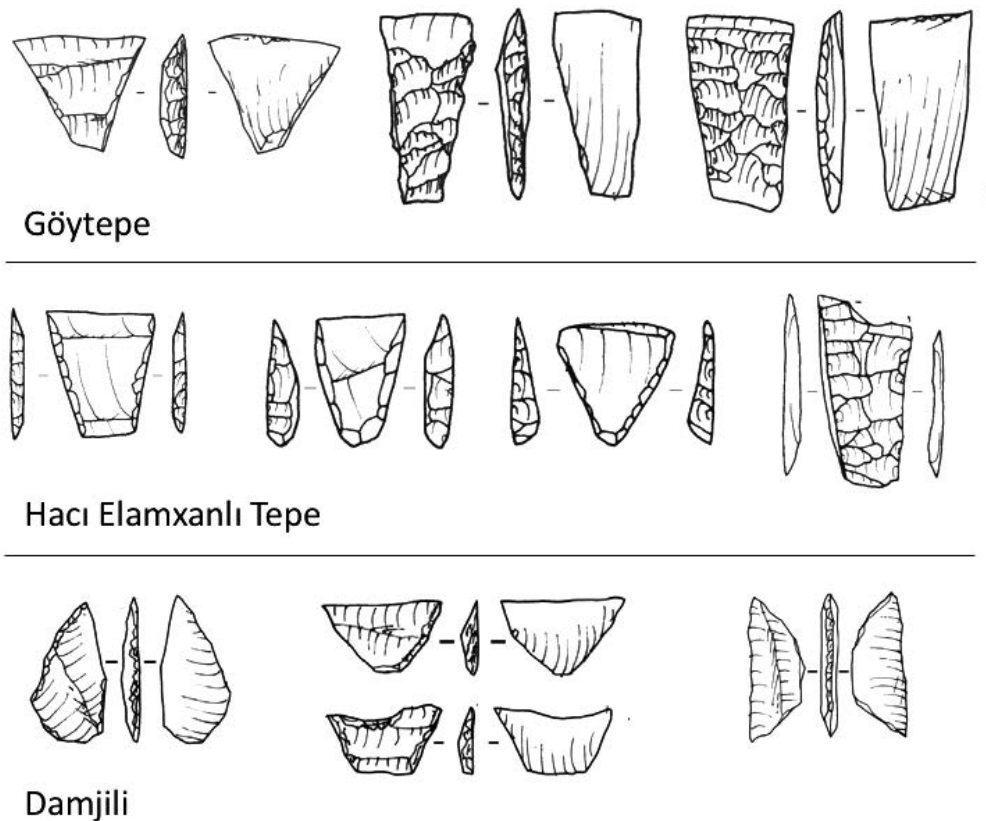


図1 南コーカサス地方の主な幾何学形細石器。上段：ギョイトペ（Nishiaki and Guliyev 2020）、中段：ハッジ・エラムハンル・テペ（Kadowaki 2021）、下段：ダムジリ（Nishiaki et al. 2019）

イラン南西部ファールス地方新石器時代の土器を再考する

ータル・イ・ムシュキ、タル・イ・ジャリ B 遺跡を中心にー

三木 健裕

東京大学総合研究博物館 特任助教

1. はじめに

イラン南西部ファールス州、コル川流域では新石器時代が始まった紀元前 7 千年紀後半から 6 千年紀前半にかけて、土器文様の違いをもとにムシュキ期（およそ前 6400-6100 年）、ジャリ期（およそ前 6000-5500 年）という文化期が設定されてきた。2000 年代以降の石器、動物遺存体の分析、放射性炭素年代測定の成果から、両時期の絶対年代が明らかになるとともに、狩猟の占める割合が高いムシュキ期から農耕牧畜が本格化するジャリ期へ変化していくという、生業の違いが解明されている。土器についても、両時期で明確に異なる点（外面の色調が赤／白であるか、文様が階段状／梯子状であるか等）が見られ、両時期の違いは強調される傾向にある。

そうしたなかで R. ベルンベック（Bernbeck）は近年、同地域のトレ・バシ遺跡から出土した土器の分析を踏まえ、両者の間にバシ期（およそ前 6100-6000 年）を新たに設定した（Bernbeck 2010, 2012）。両時期の移行期に相当し、6 つの居住層が認められるトレ・バシ遺跡の土器は、先行・後続する時期と連続する属性もあれば（土器の種類、器形、文様構造、副文様）、バシ期として区分できる明確な違いが現れる属性もある（主文様）。ムシュキ・ジャリ移行期の村落生活における土器の生産・消費の実態を細かく理解するためには、各属性が変化するタイミングのズレを捉えることが重要である。こうした研究意図をもって彼はバシ期を便宜的に設定した。しかし研究者間ではバシ期は固定的な時期区分と認識され、新たな時期区分の追加は混乱を招きやすく、バシ期をムシュキ後期ないしジャリ前期と考えるべきでないかという批判も出ている。こうした研究史をふまえ、1) ムシュキ・ジャリ移行期における土器変化の詳細、および 2) ムシュキ期、ジャリ期の土器生産・消費の実態という二点を把握することが求められている。そこで本発表では、1) ムシュキ・ジャリ移行期に相当するタル・イ・ムシュキ遺跡 TMB ピット出土土器を定量分析するとともに、2) 残存状態の良いムシュキ期、ジャリ期の土器資料の三次元モデルを作成し、両時期における土器づくりにみられる違いをより詳細に探求する。これら 2 つの分析からムシュキ期、ジャリ期の土器を再考する。

2. 分析資料と分析手法

今回対象とする資料はタル・イ・ムシュキ遺跡、タル・イ・ジャリ B 遺跡という、1950-60 年代に東京大学イラク・イラン調査団が発掘調査を実施した、ムシュキ、ジャリ期の標式遺跡である。第一の分析では、東京大学総合研究博物館所蔵のタル・イ・ムシュキ遺跡 TMB ピット出土土器 508 点を分析対象とした。TMB ピットは 1959 年に発掘された地点であり、表土層を含む 4 つの層が確認され

ている。今回は土器の種類（ウェア）、主文様、副文様、製作技術といった属性をトレ・バシ遺跡出土土器と同様に記載し、定量・定性分析を行った。その後遺跡内での時期変化、トレ・バシ遺跡出土土器との相違を定量的に比較するため、ブレイナード・ロビンソン（BR）係数を算出した。また他の新石器時代遺跡出土の土器と定性的に比較した。第二の分析では、東京大学総合研究博物館が所蔵する、復元が試みられた残存状態の良いタル・イ・ムシュキ遺跡出土土器 9 点、タル・イ・ジャリ B 遺跡出土土器 28 点、総計 37 点を分析対象とした。1 点につき 100 枚程度の写真を撮影し、SfM ソフトウェア Metashape Professional Version 1.8.3（Agisoft 社）を用いて 3D モデルを作成した。3DCG ソフトウェア Blender 上で土器の 3D モデルを仔細に観察し、製作・施文技法、文様単位割付けを検討した。

3. 分析結果と考察

第一の分析の結果、タル・イ・ムシュキ遺跡 TMB ピット内の 4 層間では、ウェア組成、主文様、副文様に明瞭な変化は認められなかった。対照的に、トレ・バシ遺跡のバシ期（IV 層、V 層）と TMB ピット出土土器を比較した結果、ウェア組成、副文様に類似性が認められる一方で、主文様には顕著な違いが確認された。他遺跡から得られた土器や放射性炭素年代の検討から、主文様は他の属性より変化のスピードが速いことがわかった。移行期の土器変化の詳細の一端を解明するとともに、各属性が変化するタイミングのズレに着目するベルンベックの見解を補強する結果となった。

第二の分析の結果、タル・イ・ムシュキ遺跡では土器個体間で製作・施文技法、階段状の主文様の割付けに技能差がみられることがわかった。その一方でタル・イ・ジャリ B 遺跡では、前者より単純な梯子状の主文様を数倍の回数にわたって割付けており、土器個体ごとの施文技能差は明瞭に認められなかった。こうした施文・割付け方法の差異が、土器づくりを実践し次代に伝えていくあり方の違いや、土器を取り巻く暮らしの違いを反映している可能性がある。ムシュキ・ジャリ期の土器から当時の村落社会にどれだけ迫れるのか、この点もさらに詳細な分析を通じて検討する必要がある。

謝辞

対象資料を分析するにあたっては、東京大学総合研究博物館西秋良宏館長・教授から許可を頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

参考文献

- Bernbeck, R. 2010. The Neolithic Pottery. In S. Pollock, R. Bernbeck, and K. Abdi (eds.), *The 2003 Excavations at Toll-e Baši, Iran. Social Life in a Neolithic Village*, 65–151. Archäologie in Iran und Turan 10. Mainz: Philipp von Zabern.
- Bernbeck, R. 2012. Discontinuities and Continuities: Constructing a Chronology from the Evidence at Neolithic Tol-e Bashi, Fars. In H. Fahimi and K. Alizadeh (eds.) *Nāmvarnāmeḥ. Papers in Honour of Massoud Azarnoush*, 43–54. Tehran: IranNegar.

イラク・クルディスタン、 シャイフ・マリフ遺跡Ⅱ号丘の年代について

小高 敬寛¹⁾、下釜 和也²⁾、三木 健裕³⁾、板橋 悠⁴⁾

1)金沢大学国際基幹教育院 准教授 2)千葉工業大学地球学研究センター 研究員

3)東京大学総合研究博物館 特任助教 3)筑波大学人文社会系 助教

イラク・クルディスタン地域シャフリゾール平原は、ザグロス山脈南西麓に沿って連なる山間盆地の一つである。「肥沃な三日月地帯」の一角にありながら、ティグリスの支流ディヤラ川を介してメソポタミア低地へと通じる要衝であり、新石器化から都市化への移行過程を定点的かつ通時的に追跡するうえでは、絶好の立地と考えられる。ところが、その時期にあたる後期新石器時代の考古学的証拠は乏しく、特に前 6000～5600 年頃のそれは皆無に等しかった。

平原内、ダルバンディ・ハン・ダム湖の北岸に所在するシャイフ・マリフ (Shaikh Marif) 遺跡Ⅱ号丘は、現在、耕作地や遊牧民の短期逗留地として利用されている小型のテル型遺跡である。表面採集土器の分析結果から、この考古学的空白を埋めることが期待されていた。2022 年 8～9 月に実施した発掘調査の目的の一つは、層位学的情報を伴った放射性炭素年代測定と考古資料の型式学的分析によって、この仮説を検証することであった。

A～C 区 (Operation A-C) の 3 地点の発掘区から採取した年代測定用の炭化物試料は計 31 点であり、内訳は A 区 24 点、B 区 3 点、C 区 4 点であった。これらすべてについてグラファイト化前の AAA 処理を実施したが、炭化物が回収された試料は 18 点にとどまった。続いて、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室に依頼してグラファイト化を行なったところ、1 点は炭素量が加速器質量分析装置 (AMS) 測定試料の調整に必要な量に満たなかったため、測定試料の調整を断念せざるを得なかった。グラファイト化した炭素試料における放射性炭素同位体比の測定は、東京大学総合研究博物館が所有する AMS を用いて実施し、最終的に 17 点の放射性炭素年代測定結果が得られた。測定できた試料の発掘区別内訳は A 区 16 点、B 区 1 点であり、C 区の試料からは年代を得ることができなかった。

測定結果 (校正年代、以下同) は、①前 7 千年紀末 (6 点)、②後 11 世紀半ば～13 世紀半ば (5 点)、③後 17 世紀半ば～19 世紀 (4 点)、④後 20 世紀後半 (2 点)、の四つの年代幅に集中した。層位別にみると、①はすべて A 区 3 層の試料が示した年代であり、試料の多く (5 点中 4 点) は井戸址と推定される 113 号遺構 (Str. 113) の覆土から採取したものであった。②は A 区の表土層からの掘り込みに伴う試料 2 点、および A 区 1 層と 4 層の試料 1 点ずつが示した年代である。そして、③は A 区 1～2 層の試料から、④は A 区 1 層と B 区の表土からの掘り込みの試料 1 点ずつから得られた年代であった。

一方、表土層を除くすべての出土土器を分類したところ、重量比で約 96 %、口縁部片の点数比で約 97 %が、型式学的にみて後期新石器時代の所産と推定される土器であった。新石器時代の土器が圧倒的な割合を占めることは層位別にみてもさほど変わらず、すべての発掘区のどの層においても、重量

比・口縁部片点数比ともに 90 %を下回ることにはなかった。したがって、シャイフ・マリフ遺跡Ⅱ号丘の少なくとも発掘地点における文化層は、現状、後期新石器時代の堆積に限られていると推測される。そして、年代測定結果のうち①の前 7 千年紀末が、後期新石器時代の年代として整合する。文化層の堆積土中の試料からはより若い②～④の年代も示されているものの、発掘時に認識できなかった攪乱による影響と考えるのが妥当であろう。実際、本遺跡の文化層は、地表面からの深さ 1 m 少々までにとどまるため、動植物による攪乱が多い。また、土坑以外に遺構がほとんど検出できなかったこと、そして採取した試料 31 点のうち 14 点の年代測定に失敗したことを考慮すると、遺跡の遺存状態が悪く、古い時代の炭化物もあまり保存されていなかったため、測定できた試料が新しい時代の炭化物に偏ってしまった可能性がある。

なお、同じシャフリゾール平原に所在するシャカル・テペ (Shakar Tepe) 遺跡 2 層は、およそ前 6100/6080～6000 年の放射性炭素年代が得られており、シャイフ・マリフ遺跡Ⅱ号丘のそれと重なる。しかし、出土土器の組成を調べてみると、後者は前者に後続する可能性が示唆される。シャカル・テペ遺跡では、最下層の 5 層からは粗製土器のみが出土するものの、4 層でハッスーナ標準土器 (Hassuna Standard Wares) が登場し、続く 3 層から後期新石器時代の最上層にあたる 2 層にかけて、その比率を高めていく。ところが、シャイフ・マリフ遺跡Ⅱ号丘は、シャカル・テペ遺跡 2 層よりもハッスーナ標準土器の比率が高いのである。したがって、数字のうえでの年代差は捉えられないが、物質文化の内容にはわずかな前後関係が認められ、シャフリゾール平原におけるこれまでの考古学的空白の一部を埋めるものと評価できよう。

上述の通り、発掘した文化層の帰属年代は前 7 千年紀末と想定されるものの、特に表土層やそこから掘り込まれた土坑、ないし文化層上部にかけての出土遺物には、放射性炭素年代の②や③の時代におけるヒトの活動を示す証拠がそれなりに含まれていた。

施釉陶器のうち釉下に沈線で幾何学文を施すズグラフフィート (Sgraffito) 文の破片は、後 12～13 世紀初頭にイラン北西部の陶窯で製作されたガールース陶器 (Garrus Wares) の可能性がある。また、型押による浮出文装飾をもつ無釉土器は、後 9～14 世紀に生産され、特に 11～13 世紀に西アジア各地で流行したものに類する。いずれも②の年代幅に収まり、アッバース朝後期中世中期に年代づけられる。さらに、指頭圧痕の列をもつ突帯を貼付した植物混和土器やロクロづくりで櫛描沈線文が施された精製土器は、近隣のカニ・シャイエ (Kani Shaie) 遺跡などに類例があり、中世中期の所産として齟齬はない。他に、比較的に多く出土した赤褐色を呈す非ロクロづくりの鉱物混和土器も、12 世紀初頭には出現していたとされるクルド土器 (Kurdish Wares) に類似する。

③の年代における活動を示す遺物としては、後 18～19 世紀初頭、オスマン朝期に流行した型式の土製パイプ片がある。また、土製水タバコ容器片もオスマン朝後期のものかもしれない。

こうした歴史時代の遺物と同様、文化層上部からは、簡易な構造物の破片と思しき粘土塊が多数出土した。一方で、遺された遺構は土坑のみで、レンガなどといった堅牢な建築物の痕跡は極端に乏しく、歴史時代の明瞭な文化堆積層も確認できない。中世中期やオスマン朝期のシャイフ・マリフ遺跡Ⅱ号丘は、現代と同様、耕作地や遊牧民の短期逗留地として使われていたのかもしれない。

前期青銅器時代ユーフラテス中流域におけるステップと低地

－テル・ガーネム・アル・アリ遺跡近傍墓域群の空間分析から－

田邊 幹太郎

東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程

1. はじめに

紀元前4千年紀に都市が出現して以降、西アジア地域は都市文化の中心地であったが、その都市社会の周辺には常に遊動的牧畜民が存在していた。ユーフラテス河中流域のような乾燥地帯では、青銅器時代から鉄器時代にかけて、都市化が断続的に継起する現象が知られている。近年では、こうした激しい社会変化に対する柔軟な対応を可能にしたのは、乾燥地での遊動的牧畜に適応した社会体制であったとする説が有力になっている。クーパー（Cooper 2006: 271）らによる当該時期の墓に関する研究や、リヨネ（Lyonnet 2009）による集落形態に関する研究によって、そうした遊動集団は都市の定住民とは別個の集団であったという従来の見方ではなく、一つの血縁集団の中に、定住する集団と遊動する集団が含まれていたという見方が主流になりつつある。

しかし、こうした主張は、もっぱら河川沿岸の都市遺跡の発掘調査を通して得られた考古学的証拠に拠るものであった。この点、遊動集団の遺跡であった可能性の高いステップ台地の墓地遺跡並びに石器散布地を調査・分析して同様の結論を得た大沼克彦ら日本隊の研究は、注目に値する（Ohnuma et al. 2010; Nishiaki 2014）。ただし、そうした日本隊の研究は、当時の調査技術の制約もあって定量的な分析に基づいていない。本稿では、日本隊のデータを含めてユーフラテス河中流域で現在、得られる遺跡分布情報を解析して前期青銅器時代の土地利用ならびに集団関係をあらためて検証するものである。

2. 資料と方法

本研究では、ユーフラテス河中流域に位置するテル・ガーネム・アル・アリ（以下ガーネム・アリ）遺跡近傍を対象とする。本遺跡直上の低位段丘上にはワディ・ダバ墓地、そしてその上のステップの先端にはワディ・シャップート墓地、アブ・ハマド墓地と大規模な墓地遺跡が連続的に広がっている。本研究で用いた墓地に関するデータは大沼ら（前掲）日本隊によるワディ・シャップート、ワディ・ダバの発掘、およびドイツ隊によるアブ・ハマドの調査（Falb 2005）から得られたものである。加えて、西秋ら（前掲）の踏査によって得られた前期青銅器時代のものと考えられる石器散布地のデータを扱った。これらのデータをもとに地理情報システム（GIS）を用いて、可視領域および移動コストの分析を行なった。

3. 分析結果と考察

ポーター（Porter 2009: 217）が論じたように墓がテリトリーを示すために機能したと考えるならば、それが見える範囲を明らかにすることには意義があると考えられる。ガーネム・アリ近傍墓地群から

の可視領域には、少なくとも二つ共通点があることがわかった。まず、これらの墓域は東方のステップからは広く視認できるが、西方にはほとんど視界が通っていない点である。もう一つは、ワディからの可視性の高い箇所に墓が集中しているという点である。ワディ底から見えない頂部に石造墓室墓があり、その周辺の斜面で可視性の高い部分にシャフト墓が作られていることがわかった。

次に放牧ルートを推定するために移動コスト分析を行なった。この分析からは、ステップ上と集落を結ぶ最小移動コストコリドー上に石器散布地および墓地群が位置していることがわかった。累積コスト距離の分析からは、移動コストにおけるステップと低地との大きな隔たりが明らかになった。ガーネム・アリからの累積コスト距離は低地には大きく広がっているのに対して、ステップ上への移動には大きなコストがかかっていた。一方、前期・中期青銅器時代移行期の集落であるテル・ジャズラからのコスト距離からは、ステップ、低地の双方に移動コストの低いエリアが広がっていることがわかった。

季節的な生活サイクルを想定した場合、農耕と雨季の日帰り放牧の拠点となる低地の集落と、牧草地としてのステップという形で、ステップと低地の関係を描くことができる。石器散布地がステップと低地を結ぶ最小コストコリドー上に分布する傾向が見られること、またガーネム・アリからステップ上で見つかるものと類似した石器が見つかることは、低地とステップを行き来する放牧のあり方を示唆している。

墓地群が、放牧に用いられたと推測されるルート上に立地しているという点は、墓がステップにおける集団のテリトリーを表す装置として機能したことを示唆している。可視領域分析の結果からもこれを支持できる。ガーネム・アリ近傍墓地群と隣接するテル・ハマディーン近傍墓地群との間は墓地の空白地帯となっており視界もこの方面には開かないことから、それぞれの墓地群を営んだ集団が、それぞれ近傍のステップを占有的に利用していたと考えられるかもしれない。

墓地の連続的な分布が示しているように、ステップと低地の資源開発は一体不可分のものであっただろう。主に穀物生産による低地の開発が減衰したことは、遊動的牧畜を行う集団にとって低地集落の凝集性の低下につながったと思われる。紀元前 2350 年ごろに集落が放棄されて以降、この地域に集落が営まれなかったことは、当地域の集団の低地とステップの開発を組み合わせた生業体系が、よりステップに重点を置いたものに変容していった遊牧化の過程を表していると考えられる。

参考文献

- Cooper, L. (2006) *Early Urbanism on the Syrian Euphrates*. Routledge.
- Falb, C. (2005) Die Kleinfunde. In: J.-W. Meyer, J. Krasnik, C. Falb & E. Vila (Eds.), *Gräber des 3. Jahrtausends v. Chr. im syrischen Euphrattal: 4. Der Friedhof von Abu Hamed*, pp. 75–333. Saarländische Druckerei & Verlag.
- Lyonnet, B. (2009). Who lived in the third millennium round cities" of Northern Syria? In: J. Szuchman (Ed.), *Nomads, Tribes, and the State in the Ancient Near East*, pp. 179–200. The University of Chicago.
- Nishiaki, Y. (2014) Steppe exploitation by Bronze Age communities in the Middle Euphrates Valley, Syria. In: D. Morandi Bonacossi (Ed.), *Settlement Dynamics and Human-Landscape Interaction in the Steppes and Deserts of Syria*, pp. 111–124. Otto Harrassowitz.
- Ohnuma, K. et al. (2010) *Formation of Tribal Communities -Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria*. Al-Rafidan Special Issue, Kokushikan University.
- Porter, A. (2009). Beyond dimorphism: Ideologies and materialities of kinship as time-space distancing. In: J. Szuchman (Ed.), *Nomads, Tribes, and the State in the Ancient Near East*, pp. 201–225. The University of Chicago.

古代メソポタミアにおける分銅の標準値に関する予察

常木 麻衣

国士舘大学 21 世紀アジア学部附属イラク古代文化研究所 特別研究員

キュルテペ文書からは、紀元前 2 千年紀にアッシリア商人がキュルテペとアッシュールの間で、交易を盛んに行っていた様子を知ることができる。当時の売買では、モノの価格は銀の重さに換算されることが多く、度量衡の重さの単位は、六十進法が用いられていた。一番小さい単位である 1 シェは、大麦一粒に、1 シェケルは 180 粒の大麦の重さに換算された (Monroe 2005: 175)。しかし、実際に出土した分銅の質量を計測すると、同じ 1 シェケルでも地域・時代によって異なることがわかって

いる。

この点について、Ialongo, Hermann, and Rahmstorf (2021) らは、分銅のレプリカを使った実験を行い、その結果、分銅の重さには誤差が見られることを明らかにしている。その一方で、国内では、岩田重雄 (1982) が分銅の重さの標準化を試みているが、それ以降の研究は行われていない。そこで、この分銅の数値のバラツキを現在のグラムで換算しなおし、分銅の標準値について研究を深めることで、当時の交易の実態がより明らかになると考えた。

本発表は、今夏に予定している大英博物館での分銅計測に向けて、20 世紀初頭頃から始まった、古代メソポタミアにおける分銅の標準値についての先行研究をまとめたものである。なお、令和 4 年度科学研究費補助金・奨励研究「古代中近東の重りの比較と経済活動」(課題番号 22H04014) による研究成果の一部でもある。

参考文献

- Barjamovic, G. 2021 Technologies of Trade in Western Asia in the Middle Bronze Age. In Rahmstorf, L., Barjamovic, G., Ialongo, N. (eds.), *Merchants, Measures and Money. Understanding Technologies of Early Trade in a Comparative Perspective* 2, 55–68, Wachholtz Verlag, Kiel/Hamburg.
- Bartash, V. 2019 *Establishing Value: Weight Measures in Early Mesopotamia*, *Studies in Ancient Near Eastern Records*, Vol. 23, De Gruyter, Berlin and Boston.
- Ialongo, N., Hermann, R. and Rahmstorf, L. 2021 Bronze Age weight systems as a measure of market integration in Western Eurasia (online), *PNAS*, Vol. 118 No. 27.
- Kulakoğlu, F. 2017 Balance Stone Weights and Scale-Pans from Kültepe Kanesh: On one of the Basic Elements of the Old Assyrian Trading System, *Culture and History of the Ancient Near East, Vol 90: Overturning Certainty in Near Eastern Archaeology, A Festschrift in Honor of K Aslthan Yener*, 341–402, Brill, Leiden and Boston.
- Malein, M.M. 2018 Iron Oxide Rock Artefacts in Mesopotamia c.2600–1200 BC, An interdisciplinary study of hematite, goethite and magnetite objects, *Archaeopress Archaeology*, Archaeopress Publishing Ltd, Oxford.
- Monroe, C. M. 2005 Money and Trade. In Snell, D. C. (ed.), *A Companion to the Ancient Near East*, 171–184, Blackwell Pub., Malden, MA.
- Oguchi, K. and Tsuneki, M. 2022 Stone Balance Weights from Area A of ‘Usiyeh, *al-Rāfidan: Journal of Western Asiatic Studies*, Vol. LXIII, 39–51.

- Rahmstorf, L. 2006 In search of the Earliest Balance Weights, Scales and Weighing systems from the East Mediterranean, the Near and Middle East. In Alberti, M.E., Ascalone, E., Peyronel, L. (eds.), *Weights in Context, Bronze Age Weighing Systems of Eastern Mediterranean, Chronology, Typology, Material and Archaeological Contexts, Proceedings of the International Colloquium, Rome 22nd–24th November 2004*, 9–46, Istituto Italiano di Numismatica, Roma.
- Zaccagnini, C. 2001 A Note on Old Assyrian Weight Stones and Weight System. In Gaziani, S., Casaburi, M.C. and Cagni, L.L. (eds.), *Studi sul Vicino Oriente Antico*, 1203–13, Istituto Universitario Orientale, Naples.
- 岩田重雄 1982 「古代メソポタミアにおける質量標準の変化」『オリエント』 Vol. 25-1, 1–16.

イラク・クルディスタン、 ヤシン・テペ遺跡出土の「アヒル」型分銅： アッシリア帝国の度量衡制度の一考察

西山 伸一

中部大学人間力創成教育院 教授

世界最古の「帝国」とされる新アッシリア帝国は、古代メソポタミア世界に君臨するにあたり、さまざまな支配制度を整備していった。その1つに度量衡制度がある。しかし、新アッシリア時代の度量衡制度については、楔形文字学を含む文献学の分野でもいまだ不明点が多くあるようである。一方、この制度に関連する物質文化については、分銅（青銅製や石製）や「はかり」の存在は報告されているものの、それらがどのように具体的に使用され、帝国各地に波及したのかについてはまだ推測の域を出ない事象が多い。

本発表は、イラク・クルディスタン地域の新アッシリア時代（鉄器時代）の拠点都市、ヤシン・テペ遺跡で発見された石製の「アヒル」型分銅（stone duck weights）を基礎とした報告と考察である。この発見は、新アッシリア時代の度量衡制度、特に帝国の地方都市における波及と適用状況について重要な示唆を与えてくれる。何よりも、この事例は、考古学コンテキストが明確であり、その使用状況についていくつかの限定的なものが推測できることである。

近年刊行された J. E. Reade の新アッシリアの分銅と「貨幣」に関する重要論文¹⁾ (Reade 2019) やより最近刊行されたスーサ出土の「アヒル」分銅に関する論文 (Ascalone and Basello 2022) を主に参照しつつ、地方都市で出土した「アヒル」型分銅やその他の分銅の種類や分布などから、ヤシン・テペ遺跡の分銅がどのような歴史的コンテキストにあるかを考察する。発表では、新アッシリアの重量制度が、帝国の中心部より地方に波及していた証拠として（大型の）石製「アヒル」型分銅が解釈できること、またこれはアッシリアの度量衡制度が組織的に地方に伝達されていたことを示すものであると述べる予定である。

註1) この文献は、山田重郎・筑波大学教授に御教示を受けたことをここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- Ascalone, E., G.P. Basello, [2022] A Duck-Shaped Weight in the Susa Museum with Elamite Inscription, *Orientalia* 91/1, 38–69.
Reade, J. E. [2018] Assyrian Weights and Money, *SAAB* 24, 125–193.



図1 ヤシン・テペ出土の「アヒル」型分銅 (YT-S1)
(©Yasin Tepe Archaeological Project)



図2 ヤシン・テペ出土の「アヒル」型分銅出土状況
(©Yasin Tepe Archaeological Project)

境界域で発行される銀貨の特徴：

ヘレニズム・ローマ時代の出土資料を中心に

津村 真輝子

古代オリエント博物館 研究員

古代西アジアのコインは金属（金、銀、銅）製が基本で、都市や国家が重量・純度を保証した印として銘やシンボルを刻印する。したがってコインは地域性、時代性を強く持つ。一方、素材が金属であるため境界を越えて流通するという特徴をもあわせ持つ。複雑に支配者が変更する西アジアの「境界域」において、こうした銀貨の発行や模倣、共存や流通がどのようになされていたのか。今回は、諸勢力争いの場ともなったユーフラテス川沿いの遺跡から出土したコイン、特に3世紀のローマ銀貨一括出土資料に焦点をあてて考察する。

対象資料は古代オリエント博物館シリア考古学調査団（団長：江上波夫）が1974～80年に北シリアのユーフラテス川中流域東岸（ルメイラ・ミシオルフェ地域）で発掘したコインである。単発の出土コインのほか、望楼を持つ小規模な砦址からコイン288枚を含む2つの壺が発見された（図2）。一壺分（115枚）が現在古代オリエント博物館の所蔵となっている。この内訳はローマ帝国カラカラ帝（在位211-217年）からヘレニウス・エトルスクス（在位251年）までの銀貨である。注目すべきは、シリア属州アンティオキア発行のギリシア語ギリシア文字銘の属州コインであり、重量単位もヘレニズム時代にこの地域で発行されていた4ドラクマである。アンティオキアではラテン文字ラテン語銘を持つ帝国コインも発行しつつ、3世紀初頭からシリア属州4ドラクマ銀貨を大量に発行した。現存する属州4ドラクマ銀貨の年代は3世紀初期から増加し254年を最後に終了する。また帝国西側からは出土せず、東方域からのみの出土である点も特徴である。したがって発行目的はアルサケス朝パルティア、サーサーン朝ペルシアに対峙するために辺境地に駐屯する兵士の給料だと推測されている。しかし実際に帝国銀貨とどのように使い分けられていたかなど不明な点も多い。

当時のコイン事情を復元する際には、コインが「残された」背景を十分に考慮する必要がある。退蔵コインが大量に発生する理由として戦時や悪貨流通時である可能性も高い。本資料については、かつて本学会において、おそらくローマ軍の軍資金であり、砦がサーサーン朝ペルシアの攻撃を受けたことで放棄された可能性を発表した。その後出土資料を再検討する中でローマ西側の辺境地・駐屯地で出土する携帯用分銅が出土していたことも判明し、この可能性が高められた。また近年、他の遺跡や骨董市場で発表されるシリア属州ドラクマ銀貨の数も増加している。ここであらためて本資料について、当時の政治状況や他の出土例との比較をしながら再考したい。今回あらたに計測した蛍光X線分析を用いた元素マッピング、ミュオンを用いた非破壊による金属分析の結果などもあわせて報告する。

参考文献

- Bland, R. 1991 *The Coinage of Gordian III from the Mints of Antioch and Caesarea*. PhD Thesis. University of London.
- Butcher, K. 2004 *Coinage in Roman Syria*, Royal Numismatic Society, London.
- Gitler, H. and Ponting, M. 2007 Rome and the East: A Study of the Chemical Composition of Roman Silver Coinage during the Reign of Septimius Severus AD 193–211. *Topoi Supplement* 8: 375–397.
- Ishida, K., Tsumura, M. and Tsumoto, H. (eds.) 2014 *Excavations at Tell Ali al-Hajj, Rumeilah: A Bronze-Iron Age Settlement on Syrian Euphrates*. Ancient Orient Museum, Tokyo.
- Kawanishi, H. and Tsumura, M. 2014 Appendix: Archaeological Investigations in the Rumeirah and Mishrifeh Areas. In Ishida K. et al. (eds.), *Excavations at Tell Ali al-Hajj, Rumeilah*, Ancient Orient Museum.
- Neumann, K. M. 2023. *Antioch in Syria*, Cambridge University Press.
- 江上波夫・増田精一・岩崎卓也（編集）1979『ルメイラ、ミシヨルフェ付近のヘレニズム期の遺跡調査概報（1974–1978）』古代オリエント博物館。
- 関 博充・三浦麻衣子 2007「ミシヨルフェ遺跡出土ロコインの自然科学的調査」『古代オリエント博物館紀要』27、127–140。
- 津村眞輝子2007「シリア、ミシヨルフェ出土のローマ銀貨」『古代オリエント博物館紀要』27、117–126。
- 津本英利・下釜和也（編集）2013『発掘・ユーフラテス ―文明を育んだ河と人々―』古代オリエント博物館。



図1 ローマ帝国の東方国境城塞群（津本・下釜 2013: 29）



図2 積石の壁にもたれるように発見された壺（津本・下釜 2013: 29）



図3 トラヤヌス・デキウス4ドラクマ銀貨
テル・ミシヨルフェ出土 11.87 g

アク・ベシム遺跡の二街区における 動物資源利用の差とその意味

植月 学¹⁾、山内 和也²⁾、アマンバエバ バキット³⁾

1)帝京大学文化財研究所 准教授 2)帝京大学文化財研究所 教授 3)キルギス国立科学アカデミー

アク・ベシム遺跡にはソグド人が建設した西側街区（第1シャフリスタン）と唐が建設した東側街区（第2シャフリスタン＝碎葉鎮）が存在する。これまでの分析で第1シャフリスタン（2018年以前調査）と、それに後続する年代の第2シャフリスタン（2019年調査）では動物資源利用のあり方が異なっていた可能性を指摘した。前者は都市的、消費者的資源利用の様相を示しているのに対し、後者は都市衰退後の小規模牧畜民村落における生産者的様相を反映すると解釈された（新井 2016、植月・新井 2020）。

本発表では新たに第1シャフリスタン街路地区（AKB13）の大通りから出土した動物遺体群（2019年調査）、教会地区（AKB8）包含層出土動物遺体群（2022年調査）、および第2シャフリスタン（AKB15）基壇周辺包含層より出土した動物遺体群（2022年調査）の分析結果を加えて、分析をおこなった。図1に示したように、これら追加資料を用いることで第1シャフリスタンでの都市衰退以降の様相が明らかとなった（AKB8）。逆に、第2シャフリスタンでは第1シャフリスタンが都市として機能していた時期に併行する可能性があるより古段階の資料が得られた（AKB15、2022）。いずれも包含層出土のためある程度の年代幅を持って捉えざるを得ないものの、旧稿で検討した年代差に加えて、ほぼ同時期における両街区の性格の差についての検討が可能となった。また、AKB13の大通り路面出土の層位的資料により第1シャフリスタン内における時期的変遷に関してもより詳細な検討が可能となった。

図2には各街区における動物遺体組成を年代順に配列した。第1シャフリスタン街路地区（AKB13）の特徴として旧稿にて指摘したウマの多さとイノシシ属（ブタを含む）の存在は、2019年度資料の追加によりさらに明確となった。なお、図示していないがこの特徴は第1路面～第6路面にかけて大きな変化がないことも確かめられた。これに対して、教会地区（AKB8）の壁外から検出された教会廃絶後の生活面や包含層出土の第1シャフリスタンではもっとも新しい遺体群では、上記特徴が薄れている。特にウマの減少が顕著である。この点については、すでに報告した第2シャフリスタン最新段階のピット群（P1,3,7）の様相とも共通している。一方で、今回新たに追加した第2シャフリスタンのより古い段階の包含層資料群（2022）でもウマが少なく、イノシシ属がほとんど見られない点は同様であった。つまり、おおむね9世紀を中心とするこの段階においては両街区において利用された動物に差があったことになる。第2シャフリスタンの当該時期は唐の碎葉鎮廃絶後に相当する。遺構に乏しいためこの時期の土地利用に関しては今後の調査に委ねる部分が大きいが、少なくとも動物資源利用の面において後代と大きな差が認められない点からは「生産者的・牧畜民的資源利用」がおこなわれていた可能性が高く、同時期の第1シャフリスタンにおいて「消費者的・都市的資源利用」が展開

していた点とは明確な差が存在したといえる。この点については、今後主要な種の性比、年齢構成、部位組成などのより詳細な分析により検討を深めていく予定である。

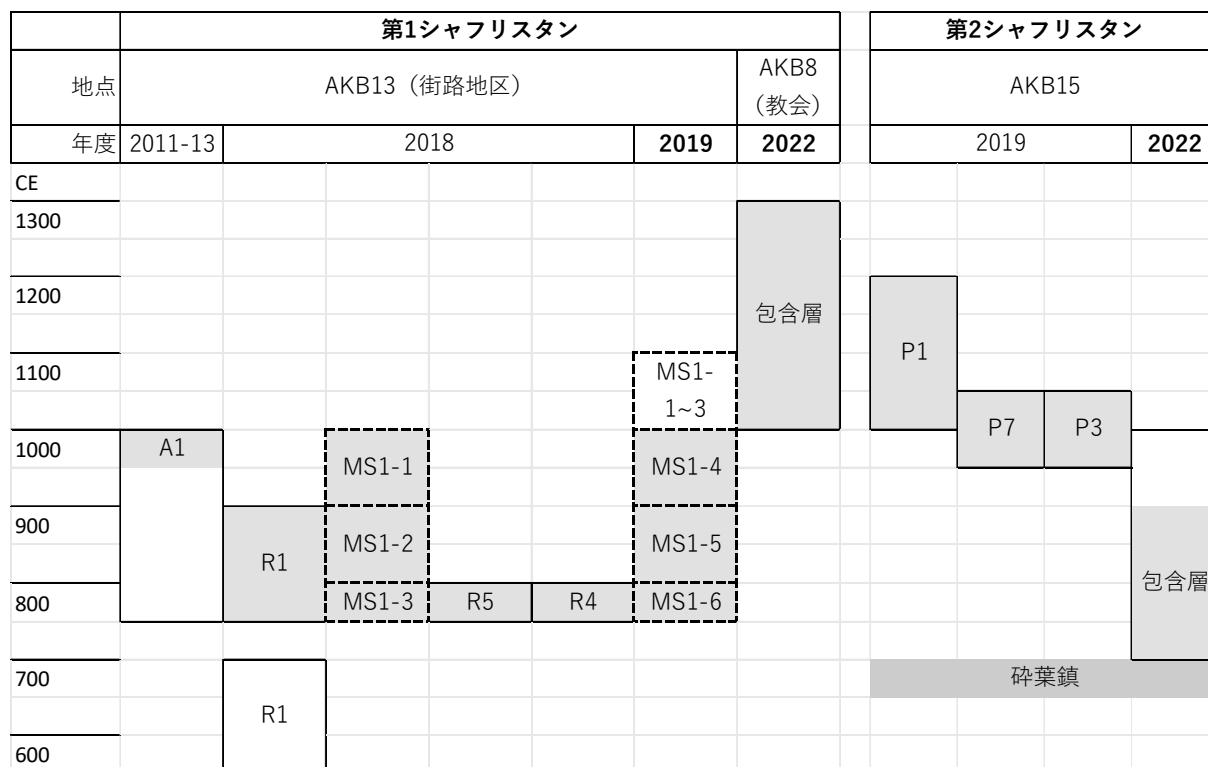


図1 動物遺体年代概要。実線枠は C14 年代測定あり。点線は測定なし（想定年代）。網掛けは中心と推測される年代。調査年度ゴシックが本発表での追加資料。

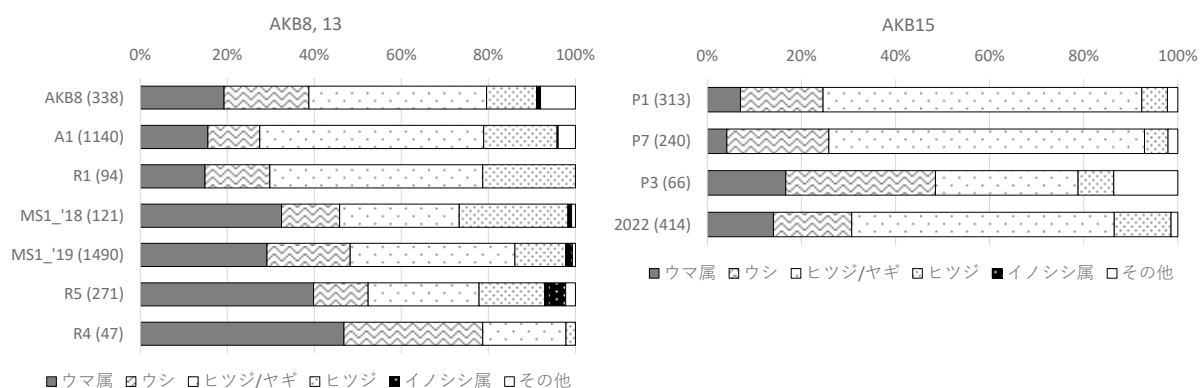


図2 街区ごとの動物遺体組成の変化 (NISP)。上部へいくほど新しい。

参考文献

- 新井才二 2016「キルギス共和国、中世アク・ベシム遺跡の動物経済について」『東京大学考古学研究室研究紀要』30
 植月 学・新井才二 2020「キルギス共和国アク・ベシム遺跡における動物資源利用」『帝京大学文化財研究所研究報告』19

ポスター発表要旨

バハレーン、ワーディー・アッ＝サイル 考古学プロジェクト 2023

安倍 雅史¹⁾、山田 綾乃²⁾、長尾 琢磨³⁾、鈴木 崇司⁴⁾、岡崎 健治⁵⁾

1) 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 保存計画研究室長

2) 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター アソシエイトフェロー

3) 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 研究補佐員

4) 駒澤大学人文科学研究科/日本学術振興会特別研究員 DC2 5) 鳥取大学医学部 助教

ディルムンは、メソポタミアの文献史料に登場する周辺国の1つであり、前2千年紀前半にメソポタミアとインダス、オマーン半島を結ぶ海上交易を独占し繁栄した王国である。現在、バハレーンが、このディルムンに比定されている。ディルムンの栄華を象徴するのが、バハレーンに残されている古墳であり、バハレーンには、前2300年から前1700年にかけて7万5千基もの古墳が築造されている。

この古墳のなかで、とくに興味深いのが「子持ち古墳」と呼ばれる古墳である。「子持ち古墳」とは、古墳に小古墳が1つあるいは複数付随した古墳のことである。

1970年代後半に、高速道路建設に先立ち、サール古墳群の一部が緊急発掘された。この調査の際に、はじめて子持ち古墳が確認された。子持ち古墳の小古墳からは人骨は出土しなかったものの、小古墳の石室の大きさから小古墳には子供が埋葬されており、子持ち古墳は、主要古墳に親、小古墳に子供を埋葬した家族墓であろうと推定された。

1980年代になると、新興住宅地の建設に伴いハマド・タウン古墳群が緊急発掘されたが、この調査の際に、はじめて子持ち古墳の小古墳から子供の人骨が検出され、子持ち古墳の小古墳に子供が埋葬されていることが証明された。

その後、子持ち古墳の発掘件数も増加し、B・フローリッヒら（Frohlich and Ortner 2000）が、子持ち古墳に関して総合的な研究を実施している。彼らの研究は、単独古墳あるいは子持ち古墳の主要古墳には16歳以上の成人が埋葬されており、子持ち古墳の小古墳には、新生児から15歳までの子供が埋葬されたことを明らかにした。しかし、一般的にディルムンの人骨は残存状態が悪く、「主要古墳に埋葬されたのは、父親だったのか、あるいは母親だったのか？」など、基本的な疑問さえ明らかにされていない。

筆者らは、2015年からディルムンの古墳群の1つであるワーディー・アッ＝サイル古墳群で発掘調査を実施しているが、2020年からは、とくにこの子持ち古墳に集中して発掘を行っている。

本発表では、2023年1月、2月に実施した第7次調査の発掘調査成果を発表するが、私たちの発掘調査によって、子持ち古墳は、従来、考えられていたよりもはるかに複雑なものであることが判明しつつある。

ポスター発表要旨

参考文献

Frohlich, B. and D. Ortner 2000 Social and Demographic Implications of Subadult Inhumations in the Ancient Near East. In Stager, L.E., Greene, J.A. and M.D. Coogan (eds), *The Archaeology of Jordan and Beyond*, 122–132. Winona Lake, Eisenbrauns.

後藤健氏旧蔵、西アジア文化遺産写真の デジタル・アーカイブ化

山田 綾乃¹⁾、高橋 奈緒²⁾、柴田 みな³⁾、長尾 琢磨³⁾、安倍 雅史⁴⁾

東京文化財研究所文化遺産国際協力センター アソシエイトフェロー²⁾ 東京藝術大学大学院
美術研究科 修士課程³⁾ 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 研究補佐員

4) 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 保存計画研究室長

東京文化財研究所は、2021年8月に故・後藤健氏が所蔵していた西アジア地域の文化遺産や発掘調査の様子を撮影した写真資料一式をご遺族より譲り受けた。寄贈された写真資料には、1980-90年代の西アジア地域、とりわけバーレーンやカタール、オマーンといった湾岸諸国の遺跡、博物館、港などが記録されている。それらは、後藤氏本人あるいは同行者によって撮影された発掘調査の記録写真やスナップ写真ではあるものの、当時の文化遺産の様相を伝える貴重な情報源となりうるものであった。そこで東京文化財研究所文化遺産国際協力センターでは、スライド、紙焼き、ネガなど異なる形式で遺された後藤氏旧蔵の写真資料を、デジタル・アーカイブ化するプロジェクトを立ち上げた。本発表では、湾岸考古学の発展に寄与した後藤氏の足跡を辿りながら、このプロジェクトの概要を報告する。

後藤氏は、サウジアラビア出土の石器コレクションを目にしたことをきっかけにアラビア半島や湾岸地域に高い関心を寄せるようになり、1986年1月に湾岸諸国周遊の旅に出ている。その成果は『オリエント』第29巻2号(1986)にて報告され、スライドにして保管されていた写真資料の一群を構成している。写真資料からは当時の遺跡の状況が追認できるだけでなく、現状との比較や周辺環境の変化、現地の人々の暮らしを振り返ることも可能である。特にディルムンの名で知られる紀元前2千年紀前半に現在のバーレーンで隆盛した文明は、1986年に同地を訪れた後藤氏をたった一度の旅で魅了し、直後に立教大学の小西正捷と共に日本湾岸考古学調査隊が組織された。その直後、後藤氏は小西氏と共に、調査候補地を選定するため再び湾岸諸国とパキスタンを訪れている。その際に撮影された写真も、コレクションの一部分を占めている。後藤氏の関心が海や港にあったからか、遺跡や博物館に次いで、海岸沿いの写真が多い。1987年、後藤氏は日本隊によるバーレーン初の調査となったブリー古墳群の発掘調査で副隊長を務めた。しかし、写真資料を精査したものの、この発掘調査に関連する写真は含まれていなかった。日本湾岸考古学調査隊は次に、1950年代にデンマーク隊によって調査された神殿遺跡アイン・ウンム・エッ＝スジュールを調査地を選んだ。1991-96年までの5期の調査を通じて、後藤氏はデンマーク隊に次ぐ2基目の井戸址を発見している。豊富な湧水が特徴とされるバーレーン島で、湧水が祭祀活動に関係する重要な要素であったことを強く裏付ける成果となった。アイン・ウンム・エッ＝スジュールの調査写真については、ネガだけでなく、プリントアウトしてシーズン別に丁寧にアルバムに整理されていた。大きな考古学的成果を得たことで、バーレーンにおける日本隊の存在を際立たせることとなったこの調査には、後藤氏も特別な思いがあったのかもしれない。

その他には、長らく後藤氏が務めていた東京国立博物館学芸部東洋課の西アジア・エジプト室長の



図1 遺物を取る後藤 健氏



図2 寄贈された写真資料一式

職に関連する写真が多数撮影されている。とりわけ、エジプトの遺跡や博物館の展示物を映した写真が目を引く。在職時に東京国立博物館で四大文明展が開催され、関連書籍も発行されていることと深く関係しており、そのための視察や準備のための資料だったのではないかと推察される。ただしこれらの写真、アルバムにも日付がなく正確なことは分かっていない。スライドにされた写真の中には、展覧会の図録を撮影したものも多数認められる。これらのスライドは授業や講演会等の投影資料として活用されていたのではないかと考えられる。

さらに、現在は立ち入ることの難しいリビアの写真資料が充実している点も後藤コレクションの特徴である。「1991 日リ友好協会 リビア調査」「リビア 91①レプシス・アグナ・サブラタ」「リビア 91②」と記した手書きラベルが貼られた3点のスライド・ファイルには、リビア各地の遺跡や博物館、港、そして人々の様子が収められている。比較的マイナーで、直接の来訪が難しい遺跡を捉えた写真資料のデジタル・アーカイブ化は考古学研究者のみならず当該地域に関心のある者にとって有益となるに違いない。

後藤氏は、2014年にバーレーンでワーディー・アッ＝サイル考古学プロジェクトを立ち上げ、ディルムンの最初期の古墳群を発掘調査し、2020年1月に逝去するまで精力的に研究活動を続けられた。晩年の写真資料はデジタルデータに切り替えられたようで、ネガ、紙焼き、スライドとしては残されていない。

以上のように、後藤健氏旧蔵の写真資料一式は、後藤氏の考古学遍歴を追認するかのように主に湾岸諸国とエジプト、リビアといった地域を写した写真で構成され、スライド、紙焼き、ネガの3つの形態のいずれかで残されている。現在は、スライドを中心にデジタル化を終え、撮影箇所の特定を進めている。デジタル・アーカイブ化した資料は、ある程度整理が進んだ段階で、オンライン・データベースへの登録など、研究者や一般の人が閲覧可能な状況に整える計画である。また、1987～96年にバーレーンで実施された日本隊による初期の発掘調査については、バーレーン国立博物館が自国の考古学調査史の1ページとして興味を示しており、バーレーン国立博物館が運営するアーカイブへの共有を打診されている。バーレーンと日本は、考古学的調査研究において連携を強化していくことで一致しており、後藤氏が遺した写真は没後も両国の考古学的調査研究の発展ならびに文化遺産の保護に深く貢献していくことが期待される。

参考文献

後藤 健 1986「アラビア湾の考古学」『オリエント』第29巻2号、125-137頁。

バハレーンにおけるイスラーム墓碑の 3 次元計測調査

長尾 琢磨¹⁾、山田 綾乃²⁾、安倍 雅史³⁾

1) 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 研究補佐員

2) 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター アソシエイトフェロー

3) 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター 保存計画研究室長

バハレーンではディルムン時代の膨大な数の古墳群が知られており、続くティロス時代にも古墳は引き続き築造された。イスラーム時代には古墳は築造されなくなり、11 世紀頃からアラビア語が刻まれた墓碑が墓の目印として利用されるようになる。しかし、それ以前に最後に確認されている墓碑は、2～3 世紀のものと推定されるティロス時代の人物装飾が施された墓碑であり、墓碑を利用する習慣には約 7 世紀のギャップがあることになる (Insoll et al. 2018)。

バハレーンのイスラーム墓碑の類例は、イランのシーラーフ遺跡 (Whitehouse 1968) にのみ確認されている。一方で、基本的な形状は類似しているものの、年代や材質、装飾の点で異なっており、バハレーンのイスラーム墓碑の由来は現在も明らかになっていない。このように、イスラーム時代前後のバハレーンにおける埋葬には未だ不明瞭な点が多い。

当初、バハレーンにどれくらいのイスラーム墓碑が存在するのかということさえ明らかになっておらず、T・インソールら (Insoll et al. 2018) の悉皆的な分布調査によって、墓碑のリスト化が進められた。これによって、約 150 基のイスラーム墓碑が残されていることが明らかになった。このリストを用いて、バハレーン文化古物局により墓碑の保護が進められているが、石灰岩で作られた墓碑は塩害などにより劣化が進行していた。

バハレーンではイスラーム教徒の墓の発掘調査は法的に認められておらず、イスラーム時代の埋葬を知るためには、墓碑やそこに記された碑文を分析するほかない。この唯一といってもよい痕跡が経年劣化によって失われつつある状況は、イスラーム時代の埋葬に対する理解をさらに困難にしようであろう。

このような状況を踏まえて、バハレーン国立博物館のサルマン・アル・マハリ館長から東京文化財研究所へと、イスラーム墓碑の保護への協力要請があり、2023 年に筆者らはバハレーン国立博物館とアル・ハミース・モスク所蔵の墓碑の 3 次元計測調査を行った。本発表では同調査の結果とその意義、今後のイスラーム墓碑研究に対する展望を中心に述べる。

参考文献

Insoll, T. and S. Almahari, R. MacLean 2018 *The Islamic Funerary Inscriptions of Bahrain, Pre-1317 AH/1900 AD*. Handbook of Oriental Studies Section 126. Leiden, Brill.

Whitehouse, D. 1968 Excavations at Sīrāf; First Interim Report. *Iran* 6: 1–22.



図1 アル・ハミース・モスク所蔵のイスラーム墓碑の例、MUS2（オルソ画像）

バハレーン国水中文化遺産調査の可能性

佐々木 蘭貞

帝京大学文化財研究所 准教授

近年、海洋問題や SDGs（豊かな海を守ろう）などと同様に水中文化遺産保護も重要な課題であるとの認識が共有され、世界各地で積極的に水中遺跡の調査が進められている。サウジアラビアはリゾートなど海岸部の開発に先立つ水中遺跡探査で複数の遺跡を発見し、博物館の建設や海底遺跡公園の整備などが計画されている。小さな島国であるバハレーンは、2014 年にユネスコ水中文化遺産保護条約を批准し、アラブ諸国内で先進的な取り組みを進めて行くと思われたが、その進展は鈍かった。

水中遺跡調査の機運を高めることを念頭に、BACA（バハレーン文化古物局）は、ワーディー・アッ＝サイル古墳群の調査でバハレーンを訪れていた東京文化財研究所の安倍雅史氏に水中遺跡の調査の可能性を打診した。筆者は、安倍氏の依頼により 2021 年と 2023 年に水中遺跡の予備探査を実施した。この発表では、2021 年と 2023 年の調査の成果を報告する。

そもそもバハレーンは、「二つの海」という呼び名に由来する。これは、バハレーンに存在した湧泉と海水が共存していたことを示す。船乗りにとって、新鮮な水を確保するメリットは大きい。前 2 千年紀前半、バハレーンは海上交通の要所として栄えたディルムン王国の所在地として知られる。度々侵入を受け民俗的な継続性は薄くとも歴史を通じて海とのつながりは強い。ポルトガルが要塞を築き、また、近現代にはパール・ダイビングが盛んであった。バハレーンは海と共にあった国であり、海事文化の研究や水中文化遺産の調査は国の歴史理解に不可欠であるが、地理的要因が水中遺跡の調査を困難にしている。水中遺跡研究発展には周知の遺跡数を増やすことが第一条件であるが、バハレーン周辺は、砂の堆積が非常に厚く、遠浅であるため遺跡を発見することが簡単ではない。

水中遺跡を探すには、海とかわりを持つ漁師からの情報や海洋開発の際のアセスメントが重要であり、世界のほとんどの水中遺跡は、この二つの方法をきっかけに発見がなされている。1990 年代にバハレーンにてテキサス A & M 大学が実施した調査では、漁師への聞き込みを通じて沈没船や海底で遺物を確認している。また、BACA では聞き込みや海難記録の調査を実施、さらに、埋め立てや浚渫工事に先行して音波探査を行っている。

今回の調査は、①海図や文献史料などに記載された沈没船の位置、海底に存在する不明な障害物、漁礁などの情報、漁師による情報（90 件）、②BACA が集約した沈没船候補地/名称不特定沈船(60 件)および遺跡ポイント/名称の特定された沈船(25 件)、③湧泉(25 件)などの情報をもとに現地へ赴き、海の状況に応じてサイドスキャン・ソナー、潜水またはシュノーケリングによる調査を計 22 地点で実施した。船着き場と思われる遺構、エンジンを積んだ木造船や鉄船、過去に利用された海底の泉などを確認した。また、浚渫が行われた現場などから堆積状況の確認もできた。以下に、重要と思われる

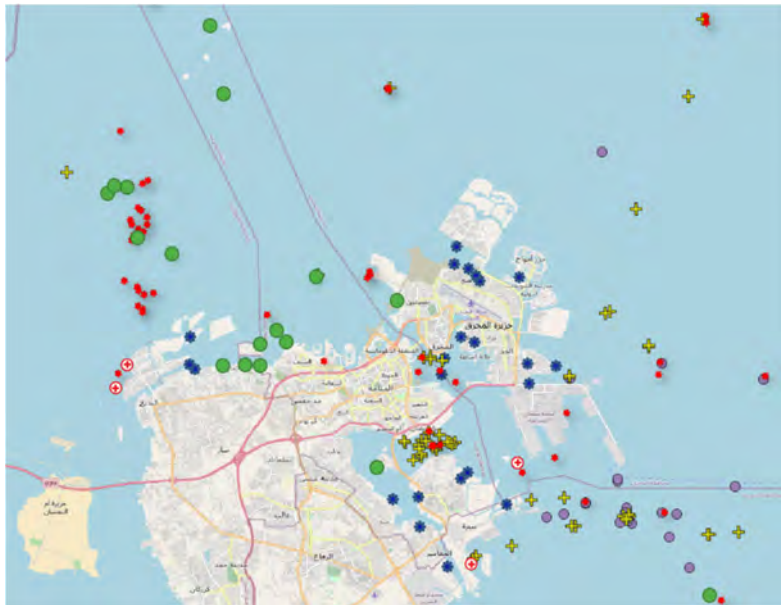
る3地点について簡単に説明する。

ナビ・サレーモスク(Nabih Saleh)：首都より南東に位置する島。モスク・墓地のそばの海岸に岩盤が露出している。波打ち際に岩礁ピットが数点彫り込まれており、係船杭などを建てて船着き場として利用された可能性がある。また、岩盤は大きく露出しており、内側に彫り込まれており、2m×2m程の空間を内側に確保している。用途や時代は不明。

コール・ファシュト (Khor Fasht)：本土より10kmほど北に位置する浅瀬。淡水が海底より湧き出しており、漁師の話によると数十年前までは水を汲みに来ていたようである。周辺を探索し、おそらくイスラム期の土器片など数点を確認した。

アル・ジャレム(Al-Jarem)：コール・ファシュトの北東に位置する100 km²ほどの巨大な浅瀬地帯。海水面が低い時代には、農地があり人が住んでいたという伝承が漁師の間に伝わっているが、文献や考古学資料では確認されていない。過去には水を汲みに来ていたと言われる泉があった。周辺には広い範囲でイスラム期と思われる壺のカケラなどが散乱していた。なお、この泉は、BACAでも未確認のものであった。

今回の調査では、数か所において海と人の関りを示す証拠を発見し、また、周辺海域の状況把握などにも役立った。潜水など簡易的な調査手法ではあるが、水中文化遺産の把握に十分な成果を得ることができる証明となった。現在は、海底面に露出した遺構・遺物しか確認できないが、磁気探査やサブボトム・プロファイラなどの探査機器を使用し、埋もれた遺跡の特定も目指したい。今後は、BACAとの協力を重視し、水中遺跡の把握、また、水中文化遺産への関心を高めるための活用事業も実行していきたい。



水中文化遺産候補地・調査地点など GIS で管理

参考文献

- Khalil, E. (ed.) 2021 *Report on Underwater Cultural Heritage Education and Training in the Arab Region*. UNESCO.
- Loughland, R. 2009 *Marine Atlas of Bahrain*. Miracle Publishing.
- Pedersen, R. 2015 “A Survey for Shipwrecks, Submerged Settlements and Seafaring Technology in Bahrain” in Tripathi, S. (ed.), *Shipwrecks around the World: Revelations of the Past*. Delta Book World.
- 安倍雅史 2022 『謎の海洋王国ディルムン・メソポタミア文明を支えた交易国家の勃興と崩壊』中公選書。

オマーン・タヌーフ峡谷の中期青銅器時代集葬墓： 型式と構築背景の検討

黒沼 太一¹⁾、三木 健裕²⁾、田邊 幹太郎³⁾、近藤 康久⁴⁾

1)東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 助教

2)東京大学総合研究博物館 特任助教 3)東京大学人文社会系研究科 博士課程

4)総合地球環境学研究所経営推進部 准教授

1. はじめに

アラビア半島南東部（今日のオマーン北部および UAE）における中期青銅器時代はワーディー・スーク（Wādī Sūq）期（紀元前 2000-1600 年）と呼ばれ、マガン（Magan）とも記録された紀元前 3 千年紀のウム・アン＝ナール（Umm an-Nār）期（紀元前 2700-2000 年ごろ）から社会・文化が大きな変容を迎えた時期である。特に墓制は、集葬が主体の北西部と一次葬が主体の東部に地域性が特徴付けられるが、近年は東部のジャバル・サルūt（Jabal Salūt）、アル＝ハシュバ（Al-Khashbah）、イズキ（Izki）などの各遺跡においても集葬墓として確実または可能性がある事例が報告され（黒沼 2023）、さらなる発見が予期されてきた。こうした中、発表者らは 2022-2023 年にオマーンのタヌーフ（Tanūf）峡谷で実施した一般踏査により、ワーディー・タヌーフ第 7 遺跡（WTN07）にて集葬墓と見られる新事例（第 122 号墓）を発見した。この墓は特徴的な構造を有し、開けた沖積地などに立地する集葬墓の通例からも逸脱するため、中期青銅器時代の墓制を再考しうる重要性を持つ。本発表では、タヌーフで発見された集葬墓の構造的特徴を概観し、類例と比較検討する。さらに立地上の条件や周辺の同時代遺跡との関連性を踏まえ、峡谷という閉鎖的な空間に集葬墓が構築された背景について議論する。

2. WTN07 遺跡の概要

WTN07 遺跡は複合遺跡であり、ワーディー・タヌーフの第 1 段丘の平坦なテラスに所在する。このテラスの北側は、東へ流下しテラス北東側でワーディー・タヌーフの本流と合流する小規模なガリーに、東側はこの本流により区切られる。遺跡は南西-北東軸に 100m 強、北西-南東軸に 40m 強の規模である。発見された遺構は、イスラーム期墓 123 基を主体に、青銅器時代および鉄器時代の建築物 8 基、およびワーディー・スーク期集葬墓 1 基からなる。遺跡範囲の西側から北側中央はイスラーム期の墓が一面に分布する一方、範囲の北側中央から北東側のテラス縁には二列壁構造の壁が築かれている。イスラーム期墓地の中程には石壁を伴う時期不詳のプラットフォームが存在し、イスラーム墓はこの遺構を避けて造営されているため、より古い時期が推定される。遺跡範囲の南側には長辺 15m 強・短辺 8m 強の矩形建築物址が存在し、方向の異なる壁の切り合いから複数の建築段階が想定される。本発表の対象である第 122 号墓はこの建築物址の東側に位置し、遺跡範囲の南東部分に所在する。

3. WTN07 遺跡第 122 号墓の構造的特徴

WTN07 遺跡第 122 号墓は、直径約 4m、高さ約 0.6m ほどの不整形な円形主体部を有する。主体部

の外壁はワーディーから採取された直径 30–50cm ほどの円礫で構築され、頂部は直径 10–15cm 以下の小礫により被覆される。主体部の中心には南西-北東を主軸とする U 字形墓室の上部が露出する。主体部北東側には、長さ 1.9m、幅 1.2m ほどの張り出しが伸びる。頂部と外壁が連続するため一体の構造であると考えられる。一方で、主体部南西から南東には、主体部に張り付く幅 1.8m ほどの付属部が存在する。頂部の構造から、この付属部は主体部外壁の外側に築かれ、主体部と一体でないと推定できる。また主体部北西側には付属墓の可能性のある遺構が 2–3 基存在する。

この構造的特徴は既知の型式と完全には合致しないが、部分的な類似が認められる。まず U 字形墓室を有する円形主体部は、S. リゲッティ (Righetti) 分類による CM4d 型に近い (Righetti 2015)。CM4d 型には U 字の根元部分に羨道を持つ事例があり (ジャバル・アル＝ブハイス (Jabal al-Buḥays) 遺跡 12 号墓など)、第 122 号墓の北東部張り出しも羨道の可能性がある。なおワーディー・タヌーフに比較的近いジャバル・サルート遺跡 JS4 地区第 4 号墓は CM4d 型である。次に主体部南側付属部の特徴は、ナズラ (Naslah) 遺跡第 1 号墓など主体部とは別の墓室を持つ CM3d 型に近いが、この形式の主体部墓室は O 字型であり、第 122 号墓とは異なる。また北西部の付属墓または施設については、ジャバル・サルート遺跡 JS4 地区第 4 号墓に一次葬墓が付属する事例や、大型の一次葬墓に小型の一次葬墓が付属する事例 (パウシャル [Bawshār] 遺跡など) がある。これらを総合すると、既知の別々の型式要素を折衷的に取り入れ、一つのかたちにまとめたものが WTN07 遺跡第 122 号墓であると言える。

4. 考察とまとめ 一立地と構築背景

ワーディー・スーク期の集葬墓はこれまで開けた立地で見つかっており、峡谷内で発見された確実な事例はない。集葬墓は、概ね水資源が豊富で耕作可能な開けた土地を有するなどの、定住的な生活が可能となる条件の場所に築かれており、この点からも WTN07 遺跡第 122 号墓は類例がない。その一方、ワーディー・タヌーフでは逗留地であるムガーラ・アル＝キャフ (Mugharat al-Kahf) 洞穴 (WTN01) 遺跡や一次葬墓からなる WTN13・14 遺跡が見つかっており、ワーディー・スーク期の活動痕跡に富んでいる。これらはいずれも峡谷を通じた山系の両側の往来と関連する遺跡と見られており、紀元前 2 千年紀の移動性が反映されている。これを踏まえると、WTN07 遺跡第 122 号墓の集葬墓もまた移動の過程での埋葬のために構築された可能性が考えられ、ワーディー・スーク期の集葬墓の構築背景には定住性のみならず高移動性も関連する可能性が考えられる。以上から、ワーディー・スーク期の集葬を巡る墓制はより多様であり、移動に伴う集葬墓の造営・利用例も考慮する必要が出てきたと言える。

参考文献

- Righetti S. 2015 *Les cultures du Wadi Suq et de Shimal dans la péninsule omanaise au deuxième millénaire avant notre ère. Évolution des sociétés du Bronze Moyen et du Bronze Récent*, 3 Volumes. Ph.D. dissertation. Paris, Université Paris 1 Panthéon-Sorbonne.
- 黒沼太一 2023 「南東アラビア、紀元前 2 千年紀前半のワーディー・スーク期における墓制の地域性—墓の形態と立地からの検討—」『西アジア考古学』24 号 27–45 頁。

日本西アジア考古学会 第28回総会・大会実行委員会

実行委員長：齋藤 正憲

実行委員：小高 敬寛

門脇 誠二

千本 真生

田尾 誠敏

高橋 寿光

前田 修

三木 健裕

南澤 武蔵

日本西アジア考古学会 第28回総会・大会要旨集

2023年6月24日 発行

編集：日本西アジア考古学会 第28回総会・大会実行委員会

発行：日本西アジア考古学会

〒305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1

筑波大学人文社会系歴史・人類学専攻 三宅研究室

e-mail：office@jswaa.org



J. S. W. A. A.